中国60年代と世界

第7号　2016-3-31
発行人〈中国60年代と世界〉研究会
編集人 文革50周年再検討会編集グループ

第6回研究会報告　陳継東、渡名喜庸哲、前田年昭……(1)／(第7回研究会発表要旨)自由派知識人の文革批判　及川淳子……(4)／胡傑監督『星火』字幕(その3)　土屋昌明……(9)／大躍進運動前後の北京　解題・前田年昭……(18)／魯迅邦訳の比較をとおして、自省(反省＝闘争)の力を考える　前田年昭……(25)

第6回研究会報告

フランス68年5月をめぐる史観論争を通じて、文革やISを考える

1月28日、第6回研究会がもたれた。松本潤一郎から「靴のない医者と国境のない医者　フランスにおける中国文化大革命受容の一側面」との報告がなされた。松本は、リチャード・ウォーリン著『1968パリに吹いた「東風」　フランス知識人と文化大革命』(福岡愛子訳、岩波書店2014)を、クリスティン・ロス著『68年5月とその後　反乱の記憶・表象・現在』(箱田徹訳、航思社2014)と対比的に参照しながら批判した。報告は、会報第6号に掲載した発表予稿にそってなされた。

報告を通じて、松本が強調したのは、ものの考え方・生き方には、序列をつけるのか、序列を退けるのかという二つがあり、文化大革命は序列を退けて考えることを提起しているのではないかという点であった。

松本は、エドワード・パーマー・トムソン『イングランド労働者階級の形成』の「序文」を歴史記述の方法・考え方の基本として引用した。過去より現在が進んだものとして、肯定的に現在を把握するウォーリンの進歩主義という序列化を批判した。また、ウォーリンが「68年5月」を若者の反乱のみと見、西欧民主主義の価値の再発見という歴史から切り離されたストーリーをつくるの対して、ロスが、学生・労働者・農民が社会的役割を逸脱して「その後」の経験も捉えて精緻に描き出している点を松本は指摘した。そして、68年の後を考える時、経験の隠蔽や消去が何を見逃してしまうか。闘った相手のなかへ戻らなければいけなかった人たちのことを想像する必要性を提起した。背景にある凄まじい苦しみを想う必要性を強調し、参考映像として『ヴォンデール社工場の操業再開(LAREPRISE DU TRAVAIL AUX USINES WONDER)』(1968年 https://www.youtube.com/watch?v=ht1RkTMY0h4)を紹介した。

松本はIS問題にふれた。フランスは人権を口実にISへ空爆しているが、テロられるのは当然であると発言した。IS問題は、われわれが文革の提起や課題をいまも回避しているから発生しているとも述べた。

発表をうけて討議に入った。前田は、松本が『イングランド労働者階級の形成』を引用して述べた、歴史からどう学ぶかという点について共感すると述べ、文革が序列を問い直す場であり、ひっくり返す実験の場だったのではないかと指摘した。文革における具体例として、半工半読をめぐる紅衛兵内部の路線対立を挙げた。

これに対して、土屋が、前田の発言こそ文革はこうだという決めつけであり、序列をつける考えではないかと批判し、紅五類・黒五類の序列をつくったのは文革だったと指摘した。

前田が反批判に立ち、文革の象徴として紅五類・黒五類を挙げる「定説」とは反対に、紅五類・黒五類こそが文革で問い直されたとの見方が必要と述べた。

ある参加者は、68年以降に広まったアソシエーションの運動を抵抗なく受け入れたと述べた。社会的弱者みずからの運動が生まれた、しかし、日本とフランスの活動家を比べた場合、現在、日本は出自を隠してでしか運動ができない――と指摘した。

また別の参加者は、松本が報告で述べたように、

ウォーリンの歴史的認識がでたらめであると発言した。そして、68年5月が、大文字の主体や他者を分解した点、ロスがアルジェリア戦争、移民排斥について提起した点をきちんと議論すべきとも述べた。

他の参加者は、報告を受け、文革に対する自身の考えを再考しなければいけないと述べた。また、知識人らの運動の関わり方や労働者の文化創作活動について、中国とフランスの違いがよくみえたとも述べた。今回の報告が、新たな文革へのアプローチを示したと同時に、現在を考えるうえでも重要であると述べた。

報告と討論後、幹事土屋から、研究会の当面の方向について提起がされた。(1) 3月例会後、出版企画の準備と連動させて、4月、5月と月一回の例会開催としたい。(2) 出版企画と情報交換を目的とするメーリングリストを2月から始めたい。(3) 5月の胡傑作品連続上映への取り組みでは、研究会からレポーターを毎回出して討論会として行いたい。

当日配布資料

・高橋和巳「新しき長城（中）」(『朝日ジャーナル』1967年5月28日号)

（敬称略　文責・田中）

文革への新たなアプローチ

陳継東

松本氏の発表は大変興味深く、意味のある試みである。何故かというと、氏の報告によって、フランスの68・5運動は中国文革の鏡のような存在になり、文革に欠如した部分、強いていえばその欠陥がより鮮明に映し出された気がするからである。もしフランスの68・5運動では人権、平等、民主主義といった理念が守られたとするならば、文革は階級闘争の立場をとることで、対立する側に対して徹底的に軽蔑や抹殺をするといった性格が一層浮き彫りにされた。また、官僚主義の打倒、権威主義への反抗、世代間のギャップなどにおいては、両者には共通する点が多く見られる。そして、運動のなかで知識人が果たした役割も異なっていたようにみられる。前者はサルトルなどのような知識人が積極的に運動に関与し、運動の継続や方向などに一定の影響を与え、知識や文化への否定や断絶が見られない。対して、文革においては、専門的な知識の有用性をあくまで政治的正確という立場をもつことで初めて認められるという考えである。実際は知識無用論が広がっていたし、知識人の改造を余儀なくされたのである。松本氏が指摘されたように、フランスで言われた文化と文化大革命の文化とはどうも異なるようである。その違いは文化の階級性にあると考えられる。つまり、文革の文化とは労働階級（農民を含む）が生み出された鮮明な階級性をもつもので、知識人の文化創作の活動のようなものがその労働者の階級性を持たない限り、すべて否定されるべきものとされたのである。また、フランス知識人の文革理解は、朝氏が前回報告された日本の文革理解と共通する点も見られる。それは断片的な知識によって文革の全体的性格を想像し、またその想像によって自国の状況と関連付けることで、連帯や世界性を想像するに至ったということである。つまり、文革の全体的性格を想像することをもって、自国の状況と関連付け、自国で進行している運動との連帯関係を見出し、それによって文革と自国の運動に世界性をもつことを想像するに至ったのではないか。この二重の想像はあくまで当時の歴史的な制限のなかで展開されたもので、その歴史的条件のもとでそれなりの合理性が認められる。現在に立つわれわれは、その想像を誤ったこととして批判するより、それはむしろ我々の現在も似たような想像に陥る危険性があるという歴史的教訓を提示されているのではないかと受け止めなければならない。松本氏のご報告は文革への新たなアプローチを示していると思う。

（ちん・けいとう　青山学院大学教員）

松本氏の発表「靴のない医者と国境のない医者」に寄せて

渡名喜庸哲

松本氏の発表は、フランスの知識人における文革受容についてのリチャード・ウォリンとクリスティン・ロスの両氏のそれぞれ見方の異なる著書をめぐるものであった。「人権」概念なるものが、フラン

スの知識人らによって肯定的に議論されるようになるのはようやく70年代終わりになってであるから、その概念を文革の推進力とみなしたウォリン氏の見立ては、松本氏の言うように、的を外れたものといわざるをえない。むしろ、フランスの知識人界において毛派がその後いかに変容を遂げたかという問いは、サルトルやフーコーといった「知識人」との関連よりも、一方の「ヌーヴォー・フィロゾフ」の右傾化（たとえばグリュックスマンらのサルコジ支持）、他方で「毛からモーセへ」の回帰を遂げたベニー・レヴィに顕著に見られる（この場合はユダヤの）共同体主義の勃興との関連で捉えるべきではないか。思い起こせば、（ロスのそれと並ぶ堅実な〈68年5月〉論（ただし未邦訳）で知られるジャン＝ピエール・ルゴフが指摘するように）この世代は、その後のフェミニズムやエコロジーなどのいわゆるニュー・レフトの展開だけでなく、ミッテラン政権下での「近代化」の推進とも無縁ではなかった。松本氏の発表は、文革50周年を経て、各国においてそれがどのように受け止められていったのか改めて中長期的に見直す時期に来ていることを実感させてくれるものであった。　（となき・ようてつ、慶応義塾大学教員）

「靴のない医者」に思いを寄せて

前田年昭

過去の理解とは現在への認識である。現在への見方、考え方が変われば過去の諸事実の意味の識別が変わる。

松本潤一郎さんの例会報告は、68年5月という史実の把握において、政治から倫理へ、平等から自由へ、と転回を遂げ現状を追認していくリチャード・ウォーリンを、歴史に対する簒奪として暴き出した。ウォーリンの過去把握は、政治と平等の集合性の経験を“存在しなかったこと”にしてしまう現在への見方に起因するものであり、歴史修正主義なのである。

松本氏が土台に据えた歴史家エドワード・パーマー・トムソンの「ある人間の行動がそれにつづく進歩の見地から正当化されるか否かをもって、われわれの唯一の判断基準とすべきではない。つまるところ、われわれ自身が社会的進歩の果てにいるわけではないのである」という立場は、文化大革命の総括からISの評価まで、関連しあっているすべてを見つめる際の羅針盤となるものであろう。

（まえだ・としあき、神戸芸術工科大学非常勤講師）

―――――今後の研究会予定―――――

第8回　4月28日（木）「文革の伏流としての反右派と大飢饉　胡傑監督『星火』をめぐって」
報告・土屋昌明（専修大学教授）

第9回　5月26日（木）「全体主義社会における知識人　林昭とハンナ・アレント」
報告・陳継東（青山学院大学教員）

〔8ページからの続き〕
張感に満ちている。習近平に対する個人崇拝について、現在、中国の知識人やジャーナリストが自由な論争を展開することは非常に困難である。一国両制度を掲げている香港でさえ、習近平に関する書籍の出版をめぐって不可解な事件が相次いでいる状態だ。

毛沢東を礼賛した文革の歴史を教訓として学ぶならば、指導者に対する個人崇拝という問題は、過去の歴史としてだけではなく、現在の中国社会が克服すべき課題として再検討されるべきだろう。文革50周年の今年、庶民の文革への郷愁と習近平に対する個人崇拝は極めて重要な問題である。

今年、文革をめぐる言説は中国でどのように展開され、深化するだろうか。その前提として、言論や思想の自由が保障されるべきであることは言うまでもない。文革研究は歴史研究であると同時に、現在の中国における思想、言論、報道、学術研究の自由に直結する極めて今日的な問題である。

（おいかわ・じゅんこ、法政大学客員学術研究員）

｛会報は今号までで休刊しメーリングリストに移行します。参加ご希望の方は幹事・土屋 the0561@isc.senshu-u.ac.jp までお申し込みください。｝

第7回研究会（2016年3月31日）発表要旨

自由派知識人の文革批判――徐友漁の思想と行動を中心に

及川淳子

1．はじめに

今年2016年は、文化大革命（以下、文革）の発動から50年、終結から40年となる節目の年である。文革を専門に研究しているわけではないが、報告の機会を頂いたことに感謝し、自分の問題関心に引き寄せながら文革研究の意義について考えてみたい。

正直に言えば、文革というテーマは、非常に心が重苦しく、悩ましく、様々な課題に向き合わざるを得ない、そうした緊張感から逃れられない問題だ。なぜなら、中国の現代史だけでなく、現在の中国との関わり方についても立場や態度を自問自答することになるからだ。無論、筆者のこうした感情などは、文革の時代を体験した人々を前にすれば言葉にするのも憚られる。だが、文革を学術研究の分析対象として見るよりも、身近に交流する中国の友人、知人たちの体験談として直接耳にする機会が多いため、筆者にとっての文革は、「歴史の事実」よりも「歴史の記憶」としての関心を呼び起こす。

例えば、親しくしている上海の大学教員夫妻が文革を振り返る時、それは彼らの青春時代の物語であり、家族の歴史として語られる。大学内で批判大会が過激化し、武闘の末に凄惨な事態に到った様子を淡々と語りながら、しかし同時に、文革期に青春を過ごした彼らの底知れぬ解放感、理想、そしてロマンスも郷愁として語られる。

研究を目的としたオーラル・ヒストリーの聞き取り調査ではなく、あくまでも個人的な交流の中で耳にする文革体験談だが、個別具体的な「歴史の記憶」には強い説得力がある。中国の友人、知人たちが語る愛憎相半ばする文革体験談は、歴史の事実よりも、どのような歴史の「記憶」が、いつ、誰によって、どのように「再生」されるのか、あるいはされないのかという「記憶」に関わる主体性と現在性の問題として問いかけてくるのだ。

当然ながら、「記憶」には当事者の思い違いもあれば、選択的あるいは恣意的な取捨もあり、それらの可能性を排除することはできない。断片的な「記憶」と「忘却」のはざまで再構成されたものは、過去よりも、「記憶」を「再生」した時点における問題関心である場合も多いだろう。

指摘しておくべきは、そうした歴史の「記憶」をめぐって、中国では政治的な意図による「記憶の忘却」や「記憶の抹殺」と、それらに対抗する「忘却の拒絶」および「記憶の再生」が重層的に行われている現実があるということだ。それ故に、文革がどのように記念され、研究され、人々の「記憶」がどのように再生されるか、あるいはそうではないのかという問題を詳細に検討することで、文革研究の意義を再検討し、文革をめぐる現代の問題を分析する手掛かりになると考える。

この報告では、まず、筆者が北京で生活していた2006年当時、つまり文革発動40周年時点での中国国内の文革をめぐる情況をふまえ、次に、その時期から筆者が交流を続けている徐友漁の文革批判について紹介したい。2006年、北京で徐友漁たちが開催した文革シンポジウムと、現在アメリカ滞在中の徐友漁が取り組んでいる文革50年記念事業は、自由派知識人による文革研究の動向を知る上で極めて重要だと考える。

2．2006年――文革をめぐる「記憶の再生」

文革発動40年の2006年当時、筆者は北京で文革に関する中国内外の報道ぶりを観察していた。歴史的な節目の5月16日前後、まず、日本メディアの報道を見ると、「『文革』恐れる胡錦濤指導部　発動40周年に『沈黙』社会の安定を優先」（時事通信、5月13日）、「文革40周年、消えぬ毛信仰」（『産経新聞』、

5月13日)、「あす文革発動40周年　記念行事封じ込め」(『東京新聞』5月15日)、「文革40年なおタブー　中国メディア沈黙　当局『触るな』厳令」(『朝日新聞』5月17日)などの見出しが並んだ。

欧米メディアでは、「文革は20世紀最大の蛮行のひとつだ。だが、中国ではほとんど理解されていない。中国共産党は自らの失敗について批判はもちろん、検討することさえ許そうとはしない」(『Economist』5月20－26日号)という批判や、「毛沢東のイメージは中国初の、そして唯一の世界的なブランドといえるかもしれない」(『New York Times』5月28日)という批判が目立った。

香港メディアは大量の関連情報を報じ、文革の被害者に対する国家賠償や社会保障政策を提起する意見などを含め、様々な議論が展開された。では、海外メディアが批判したように、中国本土では文革に関する記念行事や報道は行われなかったのだろうか。

確かに、中国メディアの報道を見ると関連報道は極めて少なく、40周年に合わせた公式行事や新たな歴史談話も発表されなかった。国務院新聞弁公室の報道官は時事通信の取材に対し、「党は1981年の『歴史決議』で結論を出した。その後の20年間の中国の実践は、この結論が正しかったことを証明した」と回答するにとどまった。

その他、文革関連の書籍は、個人の回想録などの出版は可能でも、従来の研究よりも踏み込んだ内容の歴史研究の成果を出版することは難しいようで、40周年の節目を迎えた中国では、報道や学術研究に対する規制の厳しさが感じられた。

しかし、マス・メディアの報道や出版が困難でも、2006年時点の文革記念として注目すべき2つの事例を挙げることができる。ひとつは、民間で設立された文革博物館だ。かつて、巴金は1985年に発表した『随想録』の中で、中国現代文学館と文革博物館の設立を提起した。言わば、巴金の遺言である。現代文学館の設立は実現し、「中央国家機関思想教育基地」(2000年)、「北京市愛国主義教育基地」(2002年)にも指定されている。だが、実際に館内の展示を見学すると、文革期の1966年から1976年までの展示は、2006年当時まったくの空白状態だった。

一方、党や政府から公認された博物館ではなく、民間で私設された文革博物館が話題になったのも2006年前後のことだ。筆者は、広東省汕頭市郊外にある文革博物館と、四川省成都市郊外にある博物館を見学した。いずれも中国内外の文革研究者に広く知られている施設である。

汕頭の文革博物館は、同市の元副市長が定年退職後に私財を投じて設立し、有志の寄付を募って運営している。成都の方は、不動産事業などで成功した実業家が巨額の投資を行い運営している博物館テーマパークとも言うべき広大な敷地の一角にある。対照的な二つの博物館を実際に見学して考えさせられたのは、やはり文革をめぐる「記憶の再生」だった。今回の報告では、二つの博物館を見学した際の写真を提示しながら、文革の「記憶」との向き合い方について参加者と議論したいと考えている。

2006年の文革記念で注目すべきもう一つが、同年3月24日から26日に北京で開催された「2006・北京・文化大革命シンポジウム」である。リベラリズムを掲げる自由派知識人として知られる徐友漁、崔衛平、郝建、そして中国におけるオーラル・ヒストリー研究の第一人者とも言える丁東らが中心となり、16名が参加して開催された。民間での自由な文革記念行事が当局によって厳しく規制され、徐友漁らがアメリカで計画されていた文革記念シンポジウムに参加しようとしたところ、出国が許可されなかったという事情もあった中で、小規模ながらも北京で文革記念の行事が行われたことは極めて注目に値する。

このシンポジウムでは、従来から世界の文革研究において「文革は中国で起きたが、文革研究は西洋にある」と言われてきたのは誤りだと指摘し、中国国内の文革研究を再評価した上で、新たな文革研究を模索するための議論が展開された。各セッションの主要テーマは、文革評価の基準、「二つの文革」説と造反派に関する研究、文革研究をめぐる環境と方法などである。シンポジウムの終了後、発言記録は郝建と丁東の編集によって書籍化が進められたが、中国での出版は非常に難しく、その後、アメリカのテキサスにある中国系出版社、渓流出版社(Fellows

Press of America）から発行された。シンポジウムの報告資料を参考に、どのような議論が交わされたのか概観したい。

民間の文革博物館とシンポジウムの事例から、2006年の40周年当時、文革をめぐる言論空間がどのような様相を見せていたか、その一端を伺うことができるだろう。10年前の文革記念に対する再検討から、今年、50周年の注目点についても考えたい。

3．徐友漁の思想と行動

2006年の文革シンポジウムの中心となったのが、当時、中国社会科学院哲学研究所研究員を務めていた徐友漁だ。中国の代表的な自由派知識人として知られ、近年、日本でも主要な論文が翻訳紹介されている。だが、徐友漁は政治的に敏感な人物として、常に当局からの圧力にさらされている。2014年、北京で天安門事件を記念する会合に参加したところ、当局によって長期間拘束されるという事件もあった。保釈後の静養期間を経て、昨年からはニューヨークにあるニュースクール大学に滞在し、大学院生を対象とした文革に関する講義と研究活動を目的として滞在中である。

今回の報告では、徐友漁の文革体験とその後の文革研究について取り上げ、彼を含む自由派知識人に広く共通すると思われる文革観について検討する。徐友漁が2011年に日本を訪れた際のインタビュー記録（徐友漁「文革から天安門事件の時代を生きて」、石井知章編『現代中国のリベラリズム思潮——1920年代から2015年まで』藤原書店、2015年に収録）とその他の関連資料を参考に、まず、文革をめぐる徐友漁の「記憶」を紹介し、文革研究について考察したい。

(1) 原罪を背負った造反派リーダー

徐友漁は1947年四川省成都生まれ。文革開始の1966年は19歳だった。彼が15歳の年に両親が相次いで亡くなったが、中国共産党の高級幹部だった父親の影響で、党を信じ切っていた少年だったという。徐友漁の父は党成立直後にフランスに留学し、パリ大学で学びながら党の活動に従事した後、モスクワの中山大学でも学んだ典型的なエリートだ。フランスでは周恩来の後任として働き、中国に帰国してからは劉少奇や廖承志の助手として勤務した。しかし、国民党に逮捕され、一時期は国民党の仕事にも従事したことから、その後、一家は政治運動の荒波に呑まれていった。

そうした家庭環境で育った徐友漁は、「生まれながらに罪を背負っているのだから、人間改造をするために毛主席の著作を学んでもっと良い人間にならなければと真剣に考えていた」という。文革が開始すると非常に興奮したが、反動的な家庭に生まれ育ったのだから革命に参加する資格はないと言われたことに傷つき、教室に残って自己改造のための学習に励んだ。

だが、両親がすでに亡くなっていたことと、文革開始直後に参加資格がなかったことは幸いだったと回顧している。「もしかしたら、私自身が父を手にかけるという非常に残酷なことがあったかもしれない。私自身がそういうことをしなかったということが、一つ幸運だったと考えている」と語った徐友漁の言葉は、インタビューの通訳を担当した筆者にとって最も印象的で忘れられないものだった。

その後、毛沢東がいわゆる「血統論」を否定したため、徐友漁は文革に参加する資格を得て、1966年の年末には四川から北京を訪れ、全国200万人の青年と共に毛沢東の謁見を受けた。熱狂の中で毛沢東への忠誠を誓い、成都に戻ってからは造反派グループのリーダーとして活躍した。

(2) 文革の熱狂と文革研究

「自分の命を投げ打ち、犠牲もいとわない」と考えるほど毛沢東思想に染まっていた徐友漁が、文革に対する疑いと不満を抱くようになったのは早くも文革開始から2年目の頃からだったという。

理由のひとつは、政治闘争を実際に体験し、いかに非人道的で、むごたらしく、薄汚いものかと痛感したこと。二つ目は、下放された先で直面した厳しい農村の現実。そして三つ目の決定的な理由が林彪事件だった。

農村では下放生活の不自由な中でも、内部発行された西洋の翻訳書を読み、ラジオでVOAを聞くこともでき、英語の勉強を始めて西洋の知識に触れた

時期でもあった。後に、中国社会科学院の研究員になってからオックスフォードに留学したのも、父親の影響や文革期の経験があったからだろう。

1972年に農村から成都に戻った徐友漁は、臨時工員などで7年間労働に従事し、1979年に中国社会科学院の大学院に進学した時は、すでに32歳になっていた。徐友漁が語った自らの思想がいかに変化したかという過程において非常に興味深いのは、文革が終わってからも共産主義に対する信念が揺らぐことはなく、むしろマルクスの哲学を学んだが故に自分を騙し続けていたという自己分析である。徐友漁はマルクスの著作を徹底して学んでいたため、中国で問題があってもそれは中国の問題で、マルクス主義、共産主義の本質は素晴らしいものだという信念が変わることなく、四人組逮捕でその信念が回復され、むしろ強くなったという。

オックスフォード留学中は、西洋政治哲学を専攻して欧米の政治制度を研究していたが、帰国直後の1989年に発生した天安門事件が、党と訣別する決定的な契機になった。以後、中国の民主化を実現する中で知識人の思想的、理論的な貢献が重要だと考え、現実の政治や様々な社会問題に対する発言を積極的に続けている。

徐友漁が研究活動の中で重要な柱としているのが文革研究である。その中でも代表作は、1999年に香港中文大学出版社から出版した『形形色色的造反——紅衛兵精神素質的形成及演変』である。紅衛兵研究を文革研究の重要な構成要素として位置づけ、イデオロギーだけでなく、教育などの社会的背景、造反の理由、文革が紅衛兵にもたらしたものなど、膨大なヒアリングから徹底的に分析した研究書だ。

だが、同書の特徴は、過去の歴史として文革を研究するだけでなく、文革がもたらした中国社会の矛盾を分析し、民主や公正について思考を重ね、文革の経験と教訓をいかにして民主化運動へと繋いでいくかという議論に発展させ、中国の今後を展望している点にある。

(3) 文革の遺制と闘う

徐友漁の文革研究の特色は、2013年に日本で出版された『文化大革命の遺制と闘う——徐友漁と中国のリベラリズム』（徐友漁ほか共著、社会評論社、2013年）でも詳しく紹介されている。同書は徐友漁が北海道大学に滞在した際のシンポジウム記録だ。徐友漁は文革期の暴力行為を徹底批判した上で、「文革の結果としての民主化運動」の意義を強調した。

徐友漁によれば、文革は「共産党側が描くような、反革命集団が毛沢東の間違いを利用して企てた陰謀」でもなければ「単に人々が騙された」わけでもなく、「数億の中国人から支持を得た政治運動」であり、「共産党が政権を樹立した後で一般市民に与えられた唯一の政治参加の機会だった」という。ここで、文革と民主化運動の関連性として、市民の政治参加を指摘している点が興味深い。「人々は文革を経験したことで、抑圧や鎮圧に抵抗する能力を大いに向上させ」、文革の先兵だった造反派の中には、文革後、民主化運動に身を投じた人も多いという。「彼らの理想と造反の精神は残されていた」と指摘しているが、これは徐友漁自身の体験に基づく説得力のある分析だ。

そして権力の側も、つまり鄧小平が天安門事件の弾圧で示した「思考と行動のロジックは、彼自身が文革で経験したことと密接に関連している。彼は学生による抗議活動を文革で起きた『造反派』による権力者に対する攻撃の再来と見た。彼が学生の鎮圧を命令したのは、『造反派』に対する恐怖と憎悪の気持ちに起因する」と解説している。天安門事件を文革の影響から論じている視点は極めて重要だ。

先に述べたように、徐友漁は「文革の結果としての民主化運動」の意義を指摘したが、文革が現代中国の政治に与えた積極的な面を単純に評価しているわけではない。「憲法や法治の観点からすれば、文革は反民主的なものであって、共産党内の血生臭い闘争がどうして民主化運動を生み出せるのか」、「毛沢東が文革中に提唱したいわゆる『大民主』が本当の民主を生み出したとでもいうのか」と自問自答する。そして、文革の意義を逆説的に考察した結果、導き出されたのが「言論の自由」である。文革期、資本主義の道を歩む実権派を告発・批判するために書かれた無数の「大字報」によって、人々は「言論

の自由こそ権利なき者が自身の権利を獲得するための重要な武器」だと実感し、「『大字報』は言論の自由そのものを意味するわけではないが、人々に言論の自由の価値と力を気づかせた」と分析している。

では、徐友漁が文革と現在の中国に関連する問題、つまり「遺制」として強く批判しているものは何か。それは、文革初期に強調された「血統論」である。現在、党の権勢を盾に富と権力をほしいままにする人たちを指して「権貴集団（権力と威勢をふるう既得権益集団）」という言葉がある。中国共産党の高官とその親族たちによる「権貴資本主義」は、まさに「crony capitalism（縁故資本主義）」にほかならない。党の元高級幹部の子弟で構成されるグループを意味する「太子党」や、その中でも特に革命に参加して顕著な貢献を果たした幹部の子女を指す「紅二代」は、政界はもとより経済界など中国のあらゆる分野で権勢を振るっている。そうした現代の「血統論」を克服することが「文革の遺制と闘う」ことにほかならない述べているのだ。

徐友漁は、「文革を徹底的に批判することは、中国が立憲民主制に向けて歩み出すのに欠かせない重要な一歩である」とも強調している。文革批判と民主化運動は徐友漁にとって一貫した思想であり、行動なのだ。2008年に劉暁波らが中心になって展開した「08憲章運動」にも加わり、署名者を代表してチェコのプラハを訪問し、プラハの春以後の民主化運動を率いたヴァーツラフ・ハヴェルと懇談した関係者数名の中にも徐友漁の姿があった。また、劉暁波がノーベル平和賞を受賞した際に文章を発表して支持を呼びかけ、日本語版『劉暁波文集』の解説を執筆するなどの活動も積極的に行った。だが、そうした徐友漁の言論活動は、近年ますます厳しい圧力にさらされている。

4．むすびにかえて

文革の発動から50周年を迎えた今年、筆者が最も注目している現象は、習近平に対する庶民レベルの個人崇拝である。集団指導体制を掲げてはいるが、習近平はすでに絶大な権力を掌握し、かつての毛沢東に近づいているかのようだ。以前は「小毛（プチ毛沢東）」という批判も聞かれたが、近頃は「プチ」に収まらない圧倒的な存在感を誇っている。紅二代という政治的優位性に加え、大胆な腐敗撲滅運動を展開し、大衆路線のパフォーマンスにも長けている習近平は、庶民が理想とする強い指導者として支持されている。

とりわけ、習近平に対する「習大大」という愛称から、庶民レベルでの人気を垣間見ることができる。かつて毛沢東を讃えて唱われた「東方紅」を替え歌にして、「中国出了個毛沢東」ではなく「中国出了個習大大」と熱唱する動画や、文革期の毛沢東バッヂを習近平にコラージュしたものなど、近頃、中国で散見される様々な現象は、まるで文革期のようだ。かつての毛沢東とシンクロする形で習近平に対する個人崇拝が庶民レベルで徐々に広がっており、またそうしたムードに対する知識人からの反発も強まっている。文革回帰の現象に対する警鐘については、「准文革」（章立凡、独立学者、章乃器の息子）、「強権恐怖政策の復興」（裴敏欣、在米研究者、Claremont McKenna College）」などの批判も聞かれる。

薄熙来が失脚する以前の数年間、重慶で展開した政治キャンペーン「唱紅」は、毛沢東時代の革命歌を唱わせる大衆運動で、古き良き時代の共産党に対する懐古ブームを巻き起こし、毛沢東や文革に対する批判を含めた激しい論争を招いた。政治的な野心から薄熙来が主導した「唱紅」と、すでに絶大な権力基盤を固めた習近平に対する現在の「習大大ブーム」では政治環境が異なるが、しかしその根底には、文革を経験した世代の庶民に共有されている歴史の「記憶」と文革に対する底知れぬ郷愁が、共通していると思われる。

元北京大学教授の銭理群は、その著書『拒絶遺忘』（1999年）において、絶対的平等社会への憧れや英雄待望論を内包する文革への郷愁を「朦朧美」と名付けて痛烈に批判した。文革の遺制として徐友漁が批判する「血統論」とともに、「朦朧美」もまた文革の負の遺産として今こそ再検討されるべきだろう。

習近平体制が本格始動してから、言論や思想に対する規制はますます強化され、中国の言論空間は緊

〔3ページ下に続く〕

胡傑監督『星火』字幕（その3）

土屋昌明 編

〔第6号からのつづき〕

53

向承鑑が印刷した当時について語る。

这个厂前身是个砖瓦厂，还有厂里留下的一些设备乱七八糟东西，一个极端简陋油印机，就是原厂的蜡纸也是现成的，遗留下来的，我们当时是两个技术员，又没有厂长，我们就管理一切,《星火》上面举着一个火炬，这是苗庆久刻的。

胡杰解释：在我采访过向承鉴先生的三年之后，才找到了部分《星火》的文章。我很吃惊向先生精准的记忆力。

胡杰：当时你还记得印了几份吗?

大概二十来份。我们在武山留了一部分，何之明、杨先勇比较核心的人看了这个，其他的一般的涉案人员大多数还没有看过。没有看过。

向承鑑：そこはもとレンガ工場だった。まだ中には機械などが残っていた。簡単な印刷機とか、ガリ版紙もそこにあった。残っていたものだ。我々は二人とも技術者で管理者はいない。自分たちが管理者だった。『星火』の表紙にはタイマツが1本――苗慶久が描いたものだ。

監督のナレーション：向承鑑氏を取材してから3年後、やっと『星火』の文章を入手した。彼の記憶力のすごさに驚いた。

胡傑：当時どのくらい刷ったのですか？

向承鑑：20部くらいだ。武山に一部分残したのを、何之明と楊先勇ら中心的人物は見た。事件に関わったとされる大多数は見ていない、見ていないんだ。

54

『星火』発刊の言葉、顧雁「幻想を捨てて戦いに備えよ」を監督が朗読。

发刊词《放弃幻想，准备战斗》顾雁：是清醒的时候了，假如你曾经为了将来的温饱而勒紧裤带，假如你曾经为了全民的富裕而日夜苦战，假如你曾经为了做好工作而兢兢业业，那么到今天你应该是清醒了，勒紧裤带的结果是口粮的进一步减少,日夜苦战的结果是供应的全面紧张，兢兢业业的结果是残酷的斗争与无情的打击。为什么曾经是进步的共产党执政不到十年，就变的如此腐化反动，这是由于建立偶像迷信压制民主，形成中央集权的法西斯统治的结果，这也是由于政治寡头们狂妄自大、指鹿为马、一味的倒行逆施的结果，这样的独裁统治硬要称作社会主义的话，应该是一种由政治寡头垄断的国家社会主义，与纳粹国家社会主义属于同一类型。目前全国人民面临着一个严峻的任务，紧接着反右倾的高潮，一个比 1957 年更大的马鞍形即将来临，已经清醒了的同志们，让我们在民主社会主义、科学社会主义的共同目下，团结起来，抓紧时机，唤醒群众，为彻底摧毁目前的强权统治而奋斗。

目覚めの時が来た。もし君が幸せのためにベルトを締め直したなら、もし君が人々の豊かさのために戦ったなら、もし君が仕事を完遂せんと励んだなら、今日この日こそ目覚めるべきだ。ベルトを締め直した結果は食糧の減少、日々の戦いの結果は社会全体の緊張、仕事に励んだ結果は冷酷非情な闘争と打撃、進歩的な共産党は十年足らずで、なぜかくも腐敗・反動に変わり果てたか。偶像崇拝で民主を圧迫したからだ。中央集権を築いたファシズムの結果である。指導者の思い上がり・馬を鹿と為す転倒、ひたすら逆行した結果である。この独裁を社会主義と言い張るなら、独断専行の国家社会主義に他ならない。ナチスの国家社会主義と同類に属する。いま全人民は厳しい任務に直面している。反右傾の高潮に続いて、1957年より大きなうねりが来ようとしている。すでに目覚めた人々は、民主と科学の社会主義をめざして、団結し機を逸さず大衆を覚醒させ、目前の強権を徹底的に粉砕すべく奮闘しよう。

55

星火メンバーの顧雁が語る。

顾雁（星火成员）：那时候我在写文章里就讲，它已经到了指鹿为马的地步，他讲什么就是什么，黑的，下面人都讲黑的，没有一个人敢出来讲这个是白的，就皇帝的

あの時こう書いた、党は既に馬を鹿と為す所まで来ている。上が黒と言えば皆で黒と言う。翌日に白と言えば皆で白と言う。誰一人これは黒でなく白だと言えない。

新衣，明天讲白的就是全部是白的。就是这个，这个道理完全是一样的。除非小孩子有可能，另外就是年青人，年青已经逐步懂了，但还没有世故到，就像林昭讲的：讲假话。

新たなる皇帝だ。昔のこの話と全く同じ。子供はまだしも青年はどうだ。次第に分かってきても、まだ世故に長けていない。林昭が語ったような方便を語ることはできない。

56

譚蝉雪と監督の対話。

问：我就特别想知道他们居然在那里提出了民主社会主义，而他们反对的是国家社会主义。

谭蝉雪：唉，我觉得好像很容易理解，社会主义从我们那一代人来说，因为开始一直受的教育，就是社会主义共产主义，所以你看我们根基是始终是围绕着这个，但是社会主义我们同样地要求民主，民主这个观点对于我们来说太重要了，因为我们身受其害。

胡傑：なぜ民主社会主義を提案したのでしょう？　国家社会主義に反対しているのに？

譚蝉雪：それはわかりやすいことです。当時の私たちからすれば社会主義は、ずっと教育されてきたもので、社会主義とか共産主義とか――根っこは常にそれをめぐって張る。同じ社会主義でも“民主”を求めた。民主という点こそが重要だった。だからこそひどい目に遭ったんです。

57

『星火』１号、向承鑑「当面する情勢と我々の任務」を監督が朗読する。

《星火》一期《目前形势及我们的任务》作者 向承鉴：整风运动和反右运动在中国历史上具有重大历史意义，它是中国共产党变质的起点，开始公开走向与人民为敌，与道义人性为敌的道路。

中国史において整風と反右派は、重大な意義がある。それは党の変質点である。人民を敵とする方向への転回点、人道を敵とする道への転回点だ。

58

譚蝉雪と監督の対話。

胡杰：其实张春元他那个文章写的很重了，但是他基本上是理论的，是理智的，是一个从理论框架下来阐述问题，但向承鉴就属于 ...。

谭蝉雪：直接的，对对。

问：当张春元看到这样一篇文章的时候，他放在《星火》里，也就能够感受到要共同承担风险了。

谭蝉雪：当时是这样的，《星火》开始没有想对外散发，没这个念头。张春元就说，正因为我们各自分散，又没有时间在一起集中起来讨论，没这个可能，而且这个风险太大，所以通过这个印，大家分开来拿着这个东西看一看，然后发表不同意见。准备这样的，就是刻印完看了以后再讨论，你到底同意什么意见？你的意见是什么？是这么个情况。

问：你们在看到第一期的时候有没有大家发表意见？

雪：没有。

问：就是连个机会都没有？

谭蝉雪：唉！没有。

胡傑：張春元の文章は内容は重いが、基本的には理論であり理智的で、一つの理論的枠から議論している。しかし向承鑑は……

譚蝉雪：直接的？　そうですね。

胡傑：張春元がこうした文を見て、それを『星火』に載せた。自分も危険だと承知していたのでしょうか？

譚蝉雪：当時はそんな―『星火』を外に出すつもりはなかった。張春元の考えは―各自が保存しておく。集まって議論する時間はないし、それは危険性も高いから、ガリ版を各自で見て、相互に意見を発表しよう。そういう準備だった。見たら意見を出し合う、君の意見はどうなのかと。そういうものだった。

胡傑：1号を見た後に意見交換は？

譚蝉雪：していません

胡傑：その機会もなかった？

譚蝉雪：なかったのです。

59

張春元「人民公社を論ず」を監督が朗読。

读：《论人民公社》，张春元，在我国当前政治生活和

現在の政治経済において、驚くべき矛盾は農業問題だ。

经济生活中，矛盾最突出最惊人的是农业问题，其实质是农民问题，人民公社并不是历史发展的必然趋势，更不是广大人民殷切愿望，而是独裁分子主观臆造的产物，是独裁分子为了保持其独裁地位而倒行逆施的结果：人民公社对于广大农村和农民最直接最残酷的迫害作用之一，就是在所谓的全民所有制，就是在所谓的全民所有制的掩盖之下，彻底的剥夺农民对土地、耕畜、种籽、农具等生产资料的使用权，剥夺农民对生产资料的最低限度的实用和需求，使农民在经济上彻底的无产化，而随着他们的经济状态的变化，在政治上处于农奴和国家奴隶的地位。

その実質は農民問題である。人民公社は歴史発展の必然ではない。ましてや広範な人民の願いでもない。独裁者の主観が捏造した産物である。独裁者が地位を保持せんがため、歴史に逆行した結果である。広範な農村と農民にとって人民公社は、最も直接的で残酷な迫害である。いわゆる全民所有制において、いわゆる全民所有制という名目で、土地・農作業の一切から農具など生産財の使用権まで、最低限の実用と要求まで徹底的に剥奪し、農民経済を徹底的に無産化し、経済状態の変化にあわせて、政治的に農民を国家の奴隷・農奴に処した。

60

譚蝉雪と監督の対話。

胡杰:你们就这么超前提出来了思想控制，政治寡头、民主社会主义，有一个利益集团。

谭蝉雪：因为事实上就是这么样，你就必然会思考，自己就给自己提出问题。为什么？我们的国家怎么会走到这样的地步？也许你没有亲身感受到它，而我们当时是在农村里面,就相对的又有他在思想上可以自由驰骋的一面。

胡傑：思想統制・少数政治・利益集団を指摘し、民主社会主義などを先取りしている

譚蝉雪：本当はこういうことなんです。考えなくてはならないのは、自分で自分に「なぜ」をつきつけること。我が国は「なぜ」こんなになったのか？　そんな疑問を自分で感じないかもしれないが、当時の私たちは農村の中にいて、逆に思想的には自由な一面があった。

61

星火メンバー王新民が張春元と譚蝉雪の関係について語る。

王新民（星火成员）：张春元不是跟彭德怀到朝鲜去的吗？他写的一部电影剧本，叫《中朝儿女》在电影文学上发表的。这个文章我都见了。张春元跟谭蝉雪好我还不知道，原来是右派同学，她是历史系的我是中文系的。

張春元は彭德懐の軍で朝鮮に行っただろう。映画の脚本を書いたんだ。『中国と朝鮮の少女』、電影文学に出した。あの作品を読んだことがある。張春元と譚蝉雪の関係は知らなかった。もと右派学生同士だが、彼女は歴史学で私は国文だった。

62

譚蝉雪が張春元について語る。

谭蝉雪：当时我和张春元接触不是很多的，因为我劳动的地方在甘泉，他在马跑泉，当中还有很长一段距离，而且只能是我每一次要出来到北道那边去办事经过那里，我才到他那里去跟他会会面，因为我们那时到底是个右派身份,不能随便乱走。他非常反感只考虑自己个人的利益。当他越狱以后，出去了以后，他觉得我一个人人身自由，这个东西不算什么。他觉得目前这种生活方式，他自己怎么说呢，他认为即对不起自己也对不起所有的朋友们。所以他不是准备直接到北京去嘛，他到北京就直接去找，就像跟孙自筠一样，要找到〈红旗〉杂志,〈人民日报〉。他去陈述他自己的见解。

譚蝉雪：張春元と会う機会は少なかった。私は甘泉で働いていて、彼は馬砲泉にいた。けっこう距離がある。しかも一回出かけるには、北道で用事を済ます時に通るだけ、そんな時にやっと会えたくらい。私たちは右派だったから、勝手に出かけられなかった。彼は個人の利益だけを考えるのを嫌った。彼は脱獄した後、外に出て、自分一身の自由など問題ではない。目前の日の送り方について、彼はこう言っていた、「これでは自分にも友達にも申し訳ない」。それで北京へ直接出向こうとした。北京へ行って直接―孫自筠みたいに「紅旗」「人民日報」へ、自分の考えを述べに行こうとした。

63

張春元「人民公社を論ず」を監督が朗読。

《论人民公社》张春元：把农民用军事组织形式编制起来，这样便于控制和驱使，使广大农民丧失了人身自由，

農民を軍隊式に組織すれば、統制し駆使するのに便利だ。農民から行動の自由を奪い、就業・転居・居住・移

劳动就业、迁居、居住，迁徙等起码的生活权利。而作为剥削与统治农民的政社合一的人民公社，却像一座大山压在农民头上，给农民带上了无形的枷锁。公共食堂就是用饥饿来进行强迫性劳役的一种工具，户口手续是一种变相的农奴卖身契。

動など最低限の生活権すら剥奪して統治する政社合一の人民公社は、ずしりと農民を押しつぶし、見えない鎖に縛りつけた。公共食堂は飢えの恐怖によって働かせる道具、戸籍は農奴売買の契約書に他ならない。

64

譚蝉雪が張春元と林昭の話し合いについて語る。

问：但是张春元是不是和林昭之间有很深的谈话?

谭蝉雪（星火成员）；大概是吧！很直接的，摊牌的。如果不是摊牌的话，林昭不会把她在资料室里弄到的《南共纲领》这些东西都交给他，对吧！不到一定程度谁敢摊牌?

胡：張春元は林昭と何か深い話をした？

譚：たぶん率直に話し合った。そうでなければ林昭は、《ユーゴスラビア共産党綱領》を彼に渡したりしなかった。でなければ、切り札を出すわけがない。

65

胡傑が向承鑑に『ユーゴスラビア共産党綱領』の影響について質問する。

问:《南斯拉夫共同纲领》后来对你有什么样的启发?

向承鉴：这个启发大了，当然我们现在撑握的情况和那时就不能比了，那个时候我们只能从各个方面推测，中共跟苏共的分歧我们已经感觉到了，而且，苏联里边发生的大量情况，我们都有很多的猜测。我们认为，大概跟中国当时的情况，就是59年前后，58年前后、57年，跟这个有类似的地方，那个路是走不通的，这个路是一条死路。另外，我因为钻到马克思主义堆堆里去以后，我发现不但没有消除我的疑虑，没能从中找到答案，相反加深我的疑虑。

胡：『ユーゴスラビア共産党綱領』は啓発的でしたか？

向：大きな啓発を受けた！　当時は今ほど状況がわからなかった。色々と推測するしかなかった。ソ連共産党との仲違いは感じとっていた。ソ連内部で大量に発生している状況も、色々と推測していた。それで考えた、中国のこの状況は、つまり57年から59年頃、ソ連の状況と似ているのではないか？　これでは先に進めない、これは行き止まりだと。それに自分がマルクス主義に傾倒してから、マルクスが疑念を消してくれない――答えを与えてくれないばかりか、むしろ疑念を深めるばかりだった。

66

「星火」メンバーの王新民が当時のユーゴスラビア共産党に対する考えを語る。

王新民（星火成员）：我赞成南共的两条，一个是南斯拉夫当时提出来，我们南共只能在人民群众之中，而不是凌驾于人民群众之上，这个观点我很赞成，第二条，南斯拉夫共产党领导人包括铁托在内，他的待遇不高于一个劳模的待遇，这两条简直是我心里非常高兴，我就表示赞成。

王：私はユーゴの２条に賛成だった。１つはユーゴが当時出した――ユーゴ共産党は人民の中にあるのみ、人民の上に凌駕せず。これに賛成だった。もう１つはチトーらの政治家の待遇が――模範労働者より高くないことだ。この２条はうれしかった。だから賛意を示したんだ。

67

林昭の肖像写真やイメージ映像をバックに林昭の詩『海鴎　不自由ならばむしろ死せん(《海鸥　不自由毋宁死》林昭)』を胡傑が朗読。

灰蓝的海洋上暮色苍黄，一艘船行驶着穿越波浪，……满载着带有镣铐的囚徒，去向某个不可知道的地方。我们犯下了什么罪过？杀人、放火、黑夜里强抢？什么都不是……只有一桩，我们把自由释成空气和食粮。

鉛色の海に暮色が漂う。船が一艘、波浪を越えて進む。……船は枷をかけられた囚人を満載し、行く先いずことも知れぬ。我々は何の罪を犯したのか？　殺人か放火か、それとも闇夜に強盗か？　そのどれでもない。……ただ一点、私たちは“自由”を空気や食糧と見なしたことだけだ。

68

「星火」メンバーの顧雁が林昭について語る。

顾雁（星火成员）：像我们，像林昭那样我鸡蛋碰石头我也要碰，是吗！不能你这个错的东西就是没有人敢来，就有这点精神，所以我觉得林昭最最突出的，可以说不仅是我们国家啦，整个人类性质，人性的问题，她就是坚持地，不管你的势力有多大有多强，你错了我就要跟你顶！就这样。

我々も林昭も卵で石を叩いた——私もだ。間違いに誰も出て来なかったらダメだ。だから林昭は傑出していると思う。中国だけでなくて人類的な性質のものだ。人間性の問題だ。彼女は相手が強かろうと多かろうと、間違っていれば楯突く。

69

顧雁と林昭の関わりを譚蝉雪が語る。

谭：《星火》出来以后，顾雁就带了一部分《星火》就回上海去了，这个时候顾雁和林昭又直接联系了。林昭主要觉得顾雁都是北大同学，所以就分外亲切的感觉。

《星火》が出てから、顧雁は一部携えて上海へ行った。この時も顧雁は林昭と直接連絡した。林昭は顧雁が北京大の同窓だから、親しみを感じていた。

70

顧雁が林昭の印象を語る。

顾雁：林昭要我了解中国近代整个近几百年来的政治发展历史，她其实要比我成熟的多，虽然我年级要比她高，我在她面前我是个小弟弟。

林昭は私にもっと——中国近代の政治史を学ぶべきだと言った。彼女は私よりずっと成熟していた。私の方が大学の先輩だが、彼女の前では小僧も同然だった。

71

向承鑑が四川の大飢饉の情況を聞いた時には決意に至っていた事情を語る。

向承鉴：1960年2月份，邓得银从四川探亲回来回兰大，路过武山，在武山下车看我，看我，谈了一下四川的情况，哎呀！太可怕啦！四川的情况太可怕啦！比甘肃还要厉害，我这个同学跟我谈一晚上，哭了一晚上，哎呀！他说四川不得了，有的县死了一半，他当时给我说了好多县名。可是我对四川的情况一点不知道，对其它省的情况差不多都知道。就因为到武山看我，看了一眼嘛，我什么都没有告诉他，我这个时候已经准备献身了，已经有些想法，并且《星火》，《论目前形势和我们的任务》我已经写了，后面用了两句打倒的口号，《星火》你们现在见不到了弄不到，那是个很宝贵的东西。这个同学后来回兰大以后，五年制大学毕业，右派，给他分到甘肃通渭中学教书，文化大革命活活打死了。活活打死了！

1960年2月、鄧得銀は四川から蘭州大に戻り、武山で途中下車して私に会った。それで四川の状況を知った。ああ、四川の状況は恐ろしかった！　甘粛よりもっとひどい。彼は一晩中話しながら泣いていた。ある県では半数が死んだという。幾つも県名を言っていた。私は四川の状況は知らなかった、他の省はだいたい知っていたが。私に会いに来て、一目会って、彼には何も話さなかった。この時もう身を捨てるつもりだった。考えていたんだ。しかも『星火』で「当面する情勢と我々の任務」を仕上げて、末尾に“打倒すべし”と書いていた。『星火』は今は見られない、貴重な物だ。彼は蘭州大に戻ってから、5年で卒業し、右派として甘粛の通渭中学で教え、文革で殴り殺された。殴り殺されたんだ。

72

王新民が「星火」事件に関わった理由を語る。

胡：您是怎么牵扯到张春元这个案子里？

王：我们兰大我们班上有五个右派，从兰大分到西北师大，快要分配以前，武山我们兰州同学，他们跑到兰州来看我，就说武山的这些同学为老百姓饿肚子，有很多不平的看法。当时我心里也是很激动，认为这些同学为民请命，敢为老百姓说话，我当然，因为有谭蝉雪我同班同学，我信任她，那我们这些同学好样的，要坚持真理。我当时有两个看法，一个你们把人饿死啦！我们说你把人饿死我

胡：あなたはどうしてこの事件に？

王：蘭州大の同窓に右派が5人いた。蘭州大から西北師範大へ移された。もうすぐ異動という頃、武山の友人たちが蘭州に来て私に会った。武山の友人たちは人々が飢えていることに、義憤を感じていると語った。私もその話に感動した。彼らは人民のために命をかけている——人民のために語っていると思った。譚蝉雪は同級生だったし信じていた。我々は真理を堅持しようと。当時

们有啥错误吗，这是一条最根本的一条。

は2つの見方があった。まず政治が餓死者を出しているんだ。それに反対してどこが間違っている！　これが根本的な信条だった。

73

譚蝉雪が『星火』第1号出来後の感慨と計画の変化を語る。

谭蝉雪：第一期印了以后，大家看了以后总觉得大家情绪好像更加激发起来，觉得有必要继续搞下去，怎么搞？当时也没有很长远的计划，但是有必要沿着这条路走下去，因为这样大家可以交流思想，当时也没想到要向外印发。后来张春元他们才提出来，应该向现在当局者高层人士印发，当时就说北京、上海、广州、武汉、西安就这五个城市。

譚：1号を印刷した後、みんなで見て、みんなの感情はより高まったようだった。続けるべきだと。でも長期的な計画はなかった。ただこの路線で続けるべきだ、意見交換できるのだからと。外部に配布するつもりではなかった。後に張春元が提案した、当局の上層部に配布すべきだと。北京・上海・広州・武漢――西安の5都市があがった。

74

向承鑑が『星火』配布を考えた理由を語る。

向承鉴：因为我们判断党内还是正直的党员干部大有人在。

向：我々の考えでは党内に、正直な幹部が多くいると思っていた。

75

胡傑が甘粛省第2書記の霍維徳の話を読み上げる。

读：甘肃省委第二书记霍维德说，思想改造把知识分子都得罪了，合作化、人民公社化运动把农民得罪了，红旗竞赛超先进赶先进，提高定额加班加点把工人得罪了，看到全国市场全面紧张的局面，他说，老子若知道是这样当初就不革命了。

思想改造は知識人の恨み、合作社・人民公社は農民の恨み、生産競争が先進性を競わせ、高い目標での残業は労働者の恨み、全国の市場が苦しんでいる状況だ、こうなるとわかっていたら革命しなかった。

76

譚蝉雪が何之明が少し遅れて『星火』に参加したことを語る。

我总觉得也是人各有志，何之明原来没参与我们这个事，后来他知道以后，跟他所处的环境一接触，他马上好像就喷发出来，他说：我就把脑袋别在裤腰里面，就是这么一种感情。

譚：人それぞれ志がある。何之明はこの件に参与してなかった。あとで知ってから、自分の環境と結びつけて、まるで爆発したみたいだった。自分は断崖絶壁を歩いていくと言った。そんな気持ちになったのだ。

77

何之明が自分の境遇を語り始める。

问：你是怎么考上兰州大学？

何：我考兰州大学这个故事比较曲折。我是1955年高中毕业，毕业之后就考吧，头一次被兰大入取，因为我到兰大就要路费，我那时就到我哥哥那里，我哥哥他是一个老革命，我哥哥肃反的时候就被审查。

胡傑：どうして蘭州大に？

何之明：それは紆余曲折がある。1955年に高校を卒業して、すぐに受験した。現役で受かったが、蘭州大に行くには交通費がかかる。兄の所に行っていたんだ。兄は革命に参加したが、反革命粛清の時に審査を受けた。

（电话铃响）

胡杰：你去接电话没事。

也许是我的采访有人跟踪，何之明老人的家人突然打电话来，要求他拒绝接受我的采访，采访被迫终止。

（電話が鳴る）

胡傑：電話に出て構いませんよ。

私を尾行していた人がいたようだ。何之明さんの家の電話が突然鳴り、私のインタビューを断るように求めた。インタビューは中止となった。

78

何先生在《星火》第二期中有两篇文章，一篇是批判中国哲学界的小丑们，他们手持阶级斗争的大棒，片面极端的强调当今统治者的主观能动性，为吹牛撒谎寻找依据，而在思想上强化法西斯统治的嘴脸。另一篇是《论政治挂帅》。

何之明は『星火』2号に2つの論文がある。哲学界の御用学者への批判、彼らは手に階級闘争という棒を持ち、統治者の主観的能動性を殊更に強調、デタラメな根拠を捜し出し、実は思想的にファシズムを強化させていると。もう1つは「政治優先について」。

79

向承鑑が『星火』第2号編集の事情を語る。

张春元6月份到武山来，这时候他不在武山，他在漳县。跟我谈了一下，我带着张春元到杜映华家里去了，叫我积极筹备第二期组稿，当时在我手跟前已经有两篇文章，一篇文章是林昭的《海鸥》，一篇是何之明的文章，还有我自己写的《食母记》，我是根据真人真事，一个孩子把母亲吃掉了，一天吃一点，一天吃一点，后来就剩下一个头了，他就跑了，以后抓回来枪毙了。我就根据这个事情写了《食母记》

向：張春元はその年6月に武山に来た。彼は漳県にいたんだ。私とちょっと話して、私は彼を杜映華の家に連れて行った。2号の編集をさせようとした。私の手元には材料が2つあった。1つは林昭の《海鴎》、もう1つは何之明の論文、私も《母親を食べるの記》を書いてあった。事実にもとづいて書いたんだ。ある子供が母親を食べてしまった。1日に少しずつ食べたんだ。頭だけが残って子供は逃げた。後に捕まって銃殺された。この事件にもとづいて書いたんだ。

80

胡傑が『星火』第2号の内容を紹介。

读:《星火》第二期稿件有向承鉴的四篇文章,《食母记》《不打自招》《三月的农村一日》—— 一个农民的自述记录，《告全国人民书》，扬先勇的《从一首歌谈起》，何之明的两篇文章《论政治挂帅》《思维与存在的统一性》，张春元的《论人民公社》,林昭的长诗《海鸥》——不自由毋宁死，顾雁为第二期所写的《跋》。

胡傑：『星火』2号には向承鑑の4つの文がある。「母親を食べるの記」「自分には伝えない」「3月の農村の1日」——ある農民の自述、「全国の人民に告げる手紙」、楊先勇「ある歌から語る」、何之明の2篇「政治優先について」「思惟と存在の同一性」、張春元「人民公社を論ず」、林昭の詩「海鴎　自由なくんばむしろ死せん」、顧雁の2号のための「あとがき」。

81

向承鑑が自分と杜映華の関係を語る。

向承鉴：杜映华是我们的顶头上司，我们是这个公社的劳考右派，他是第一把手，有天开会我去参加会晚了，他就留我就跟他住在一起，确实对我是非常好的，这个时候就已经不是专政和被专政关系，而是一种同志的关系，晚上我就在他那里吃饭，他打饭打开水打洗脚水，第二天早上因为我出门不太方便，他回到公社不太远，他打洗脸水漱口水提来，总是这样的。我们彼此关系已经非常好了。

向承鑑：杜映華は我々の直接の上司だった。我々はこの公社で労働する右派、彼は責任者だった。ある日の会議が遅くなり、私を泊めてくれた。よくしてくれた。この時の私たちは階級的な上下関係ではなく、同志の関係だった。彼の所で夕食を食べると、料理を作り脚を洗う水を入れてくれた。翌日の朝、私は右派で外へ出にくい。公社は遠くなかったので、彼は顔を洗う水を持ってきてくれた。彼との関係はとてもよかった。

82

向承鑑らの労働改造の現地を胡傑が取材。

胡杰：你还有没有印象，那些右派学生到这来?

农民：喔，学生原来在过这里，在这里住过向承鉴，还有孙和，孙和这个人很精干，上海人。划成右派，这里办了个石膏厂。他们在石膏厂里改造着呢。

胡傑：右派学生が来た頃を覚えていますか？

農民：学生たちはここにいたよ。向承鑑と孫和がいた。孫和はできるやつで上海人だった。右派にされてここでセメント作っていた。セメント工場で改造していた。

83

向承鑑が杜映華から犠牲者の様子を聞いたことを語る。

向承鉴:60年四、五月份，我到他（杜映华）家里去，他一再强调这个问题。他说：别的地方我无能为力，我尽量的以十万分努力，想办法使我所辖范围内不要发生这种悲剧。

向承鑑：60年4月か5月に杜映華の家に行った。彼は飢餓をどうするかを強調していた。他所では自分は無力だが、可能な限り努力して、管轄内では餓死の悲劇を起こさせないと。

问：当时他也知道饿死人?

胡傑：彼も餓死者のことを知っていた？

向承鉴：知道，他知道情况比我多，很多都是他告诉我的，因为我那个时候出门的机会不太多。他知道的不仅仅是武山、甘谷、通渭、陇西、定西、漳县、泯县他都知道。在阴历三、四月间，有一个县饿死了一万多人。我所指的就是武山县，这是杜映华跟我透露的。事实上比武山县严重的多的多的还有的是。他说，我已经给各个管理区、生产队已经通知了，如果口粮接不上没有办法了，立即叫所有的人宁愿一天都不出工，在家里静静的睡觉，躺着休息，尽量减少体能的消耗。 到了七月份，突然张春元给我来电话，暗语：姑母有病。传染病，小心传染隔绝，我就懂得了，根据我的判断，那边问题一暴发很可能武山要倒霉。

向：私よりよく知っていた。彼から色々教わった位だ。私は外へ出る機会が少なかったから。彼は武山だけでなく、甘谷・通渭・隴西・定西・漳県、泯県まで知っていた。春先にある県で1万人余り餓死した。それが武山県だ。これは杜映華が教えてくれた。もっとひどい所が幾らでもある。彼は各管理区や生産隊に連絡した。食糧不足でどうしようもなければ、すぐに人々を自宅待機にして、家で寝かせて休ませ、なるべく体力の消耗をなくすようにと。7月になって、張春元から突然電話が来た。おばさんが病気だという暗号だ。伝染病で、感染隔離に気をつけろと。すぐにわかった。要するに、あちらで問題が起こり武山もまずいと。

84

王新民がグループの人数について語る。

问：当初你们这个集团包括你像你这样的人在内一共是四十四个人?

胡傑：あなた方のグループは当初——あなたを含めて44人くらいだった？

王新民：不止四十四,一共涉及的将近二百啊。

王新民：44人どころでなく200人に近かった。

问：当时抓了这么多?

胡傑：では何人が逮捕されたのですか？

王新民：判了有四十几个。二百多啊！有好多根本就是沾了一点边边子，人家也认为你是反革命集团嘛。

王新民：懲役は40数人だ。200人以上だぞ！　かすっただけの者が大部分だった。みんなこれは反革命だと思ったから。

85

向承鑑が逮捕された当時のことを語る。

60年9月30号晚上，在贺家店抓的，武山的基本上就是同一天晚上抓的。

向：1960年9月30日夜、賀家店で捕まった。武山の仲間は一晚で捕まった。

86

譚蝉雪が逮捕された当時のことを語る。

谭蝉雪：第二期在苗庆久那边。当时要逮捕他们，一夜之间把他们全给抄了。

譚：2号は苗慶久の所にあった。彼らを逮捕して、一晚で原稿は全て没収された。

87

農民が『星火』メンバーが逮捕された当時のことを語る。

农民：这里有一个老百姓说：今日里杜书记到县委小礼堂被抓走了。咱就不明白，他对老百姓各方面关系都很好，也没架子，怎么抓了走了?

農民：ある人が言った、さっき杜書記が県委員会に連行されたと。俺たちはよくわからなかった。彼はみんなによくしてくれたのに。どうして連行されたのか？

88

杜映華が逮捕された当時を息子が語る。

胡杰：当时张春元?

杜映华二儿子：和我父亲一样，同案犯。因为张春元的右派反革命集团在武山改造，我父亲是县委书记，比较同情这些右派学生，而且对他们生活方面比较关怀。由于这样的情况所以就给判刑了。

胡傑：そして張春元は？

杜映華の息子：うちの父親と同犯だ。張春元の反革命集団は武山で改造していた。うちの父はその県委員会書記なのに、彼ら右派学生に同情していた。生活まで面倒みていた。だから裁判にかけられたんだ。

89

公開裁判がおこなわれた様子を目撃者が語る。

胡杰：当时的公审大会是在哪开的?

目击者:就是现在的儿童乐园，天水市的人叫体育场。公审会尤其要把学生召集起来教育，天气反正冷。我只记得天气冷。

胡傑：当時の公開裁判はどこで？

目撃者：今の児童公園だ。天水の人は体育場という。公開裁判では学校の生徒を呼んで教育する。天気が寒かったのを覚えている。

90

譚蝉雪がみずからの公開裁判の様子を語る。

问：开这个公审大会只有你和张春元?

谭蝉雪；不。天水的都在一起，张春元、胡晓愚、胡学忠、顾雁不在已经到上海去了，我。

胡傑：裁判ではあなたと張春元だけですか？

譚：いや、天水の仲間全員だった。張春元・胡晓愚・胡学忠、それと私、顧雁は上海でいなかった。

91

公開裁判の目撃者が語る。

目击者：犯人是从西门绑进来的。

目撃者：犯人は西門から後ろ手に縛られて入ってきた

92

公開裁判の目撃者が生徒動員の様子を語る。

目击者：学校组织起来让他们参加，列这队。一个学校一个学校列这队参加宣判会。

目撃者：学校は生徒を動員して並ばせた。学校ごとに並んで裁判に参加させた。

93

公開裁判の目撃者が生徒動員の様子を語る。

目击者：公安局的人架着，就把他们在学生坐的地方转了一圈。转完以后就上了台子。

目撃者：公安の人が彼らを引き立てて、生徒の周りをぐるっと一周させた。それから壇上にあがらせた。

〔つづく〕

〔28ページからのつづき〕

私は歩きながら、考えた。しかし、自分のことを考えてしまうのをほとんど恐れながら。以前のことはしばらくおくとしても、この銅貨はまた何の意味か？　彼を褒めるのか？　私に車夫を評価することができるのか？　私は自分に回答することができなかった。

この出来事は現在に至っても、なおしばしば憶(おも)いだされる。それによって私はしばしば苦痛をしのび、努力して己れにみずからを考えようとする。数年来の文治や武力も、私には幼少のころ読んだ「子曰く、詩に云う」の文句同様、半句もおぼえられない。ただこの小さな事件だけが、どうしても私の眼前に浮び、時には以前にもまして鮮明になり、私を恥じ入らせ、自己変革をうながし、且つ私の勇気と希望とを増してくれるのである。

（一九二〇年七月）

蔵出し批評

大躍進運動前後の北京（山本市朗『北京三十五年　中国革命の中の日本人技師』から）

解題・前田年昭

【解題】胡傑『星火』に描かれた向承鑑や譚蝉雪らの闘いは、国境を越え半世紀という時を超えて、今なお新鮮な感銘を与える。すべては関連しあっており、現在の理解が過去の諸々の事実の理解を可能にするからである。『星火』の闘いが反右派と大躍進の運動に抗して身命を賭して闘われた闘いであったことは事実であるが、そのことが即、反右派闘争や大躍進運動の「罪」や「誤り」を裏づけることと結論づけるのは短絡に過ぎるのではないか。

増淵龍夫が指摘したように「すぐれた同時代的観察者のなし得ることは、そのうちどの要因をとるにせよ、そのえらびとった要因の生じてくる必然性を歴史の流れの中に入って、内在的に理解すること」〔『歴史家の同時代史的考察について』岩波書店、1982年、pp.165-166〕であるからだ。

ここに紹介する山本市朗『北京三十五年』は、長い戦乱からようやく建国を果たしたものの、工業に対する準備の何もないところから近代工業をいきなり育てようとする苦闘がどんなに大変かを描いた。そこでは人びとの自発と創意の力（毛沢東のいう主観的能動性）がいかに重要で決定的な要素か、技術者・山本氏の冷静な眼は「この運動は非常によい運動であり、これが尻切れトンボに終ったのは、中国産業の発展のために、たいへん惜しいことであったと思っている。後に六六年からはじまった文化革命運動などという、騒ぎばかり大きくて実質的には何の具体的な効果ももたらさなかった運動とはちがって、もし適当な指導力をもって、この大躍進運動を指導し発展させていたならば、今の中国産業は、おそらく非常な発展をしていたにちがいない」とまで大躍進運動を高く評価している。

大躍進や三面紅旗ときくや「非科学」「冒険主義」「猪突猛進で失敗」と条件反射のように即断して顧みることのない池上彰や有象無象の「中国通」は、山本氏の証言に耳を傾けるべきではないか。一方における（ここで描かれたような）都市における大躍進運動、他方における1959年夏の廬山会議における彭徳懐の大躍進批判など、「そのうちどの要因をとるにせよ、そのえらびとった要因の生じてくる必然性を歴史の流れの中に入って、内在的に理解すること」が必要であろう。

プロレタリア文化大革命の理解のためには50年代末から60年代前半にいたる社会史的な理解が必要であるし、大躍進運動の理解が核心のひとつであることはまちがいない。

大躍進運動前後の北京　山本市朗『北京三十五年　中国革命の中の日本人技師』1980（抜粋）

土法製鉄ブーム

工業の躍進運動は、いろいろな形態をとってあらわれた。現象面で、最もひろく、最も普遍的に行なわれたのは、小型土法炉による半融鉄の精錬であった。

「一国の近代文化を決定するものは、人口一人あたりに対する鉄鋼の生産量である。全中国の鉄鋼の総生産量を、なんとかして英国の総生産量に飛躍的に追いつき、追い越さなければならない」というわけで、工場はもちろん、官庁も、学校も、研究所も、病院も、みんなそれぞれ思い思いの方法で、自分の庭の隅に炉を作って、この土法精錬で半融鉄を作りはじめた。

原材料は、構内の一隅に置き捨てられた鉄屑、綱屑、附近の鉄工場から分けてもらって自力で運んできたスクラップや旋盤の削り屑、建設現場で雨ざらしになっている鉄筋や型綱の切れ端、廃品回収場の

庭にころがっている古機械の部品や錆び切った鉄線、道ばたに捨ててある壊れたマンホールの蓋や錆びてぼろぼろになったレールと鉄管、等々、およそ鉄と鋼と名のつくもので、持ち主のないものやいらないものは、全部拾い集めてきて、めいめいの土法精錬炉へぶちこんだ。

精錬炉の形式も、実に多種多様で、石焼き芋のかまどに毛の生えた程度のものから、日本のタタラ吹きの炉に近いものまであった。鉄鋼関係の研究所や学校、それに各種の工場など、多少鉄鋼の知識のある事業体では、小さなキュポラまがいの炉を作った。北京市の遠郊で、附近に鉄鉱石のあるところでは、その有利な条件を利用して、小さな製鉄炉っを作って、鉄鉱石を直接の原料として製銑を行なったところもあるが、これは、ごく例外に属する特異例であった。燃料はもちろん有煙炭か無煙炭で、私の見た範囲では、コークスを燃料とする炉はごく少数であった。これらの炉に共通して言えることは、その大部分が、製鉄炉というより焼結炉に近い特性を持った炉で、全部が自家製であり、装入量も半トン以下の小型炉が大部分を占めていた。

この土法製鉄の操作方法やその製品を見ていると、少なくとも北京市の範囲内では、これを製鉄と呼ぶのはふさわしくなかった。原料は大部分がスクラップであり、製品は、その中の一番上等な極上品といっても、せいぜいお粗末な海綿鉄の程度であって、最下級品ともなると、ちょっと溶融粘着度を高くしたスクラップの焼結塊であった。もちろん炭素含有量などは目茶苦茶で、やっている御本尊自身も、「へえ、炭素含有量ってのは何のことですかい。とにかく鉄を出せばいいんでしょう。鉄をね」と、元気のいい焼結屋さんもかなりいた。

当然の結果として、これらの製品を、そのまますぐ工業用の原料鉄として使用することはできなかった。温度不足のために溶融炉の足らない点は、もう一度正式の工業炉で再溶解してピイグ型に鋳こめば解決できる問題であるが、困るのは、そのおのおのの炉によって、また同じ炉でも、その日その日の原料によって製品の中の炭素や硫黄や燐などの成分に大幅の開きがあることであった。そのために、これを工業用に使うためには、この、量こそ少ないが成分の非常に複雑な焼結塊を、各ロットごとに定性・定量分析をして成分を確かめた後、近似成分のものを集めて再溶融するよりほかに道がなかった。

こんな面倒なことは、とてもできるわけがなかったし、また、やったとしても経済的に引き合うはずもなかった。簡単に言えば、あれだけ大騒ぎをして、あれだけ労力を使って、あまり役に立たないものを作り上げたということである。

しかし、この土法製鉄は、当時の大ブームとなって、非常に広汎な階層の人びとが非常な熱意をもって参加した。はじめは官庁、学校、病院、研究所およびその他一切の事業体の職員と労働者を中心勢力としたこの土法製鉄運動に、まもなく北京の一般住民大衆も参加した。胡同わきの、ちょっとした空地や、道の曲り角の三角地にまで小さな炉が築かれて、文字どおり北京中の人びとが、女も男も、老人も子供も、それぞれ本業の暇をみては、交替でこの土法製鉄に従事した。

これと平行して、各種産業界では、技術改良、技術改革をその手段方法とする飛躍的増産運動が、猛烈な勢いで展開されはじめた。

まず、生産単位のそれぞれの職場では、職場中の人たちが額を集めて何日間か相談して、その職場の生産を阻害しているボトルネックを探し出した。そして、その欠陥を克服するための方法を広範囲にわたって討論し、その結果にもとづいて、個人単位の、組単位の、そして職場単位の増産計画を立てて、それを実行に移した。計画の実行中にあらわれた措置と計画の不備や、目標数字と現実の可能性との差額を、彼らは自発的に作業時間の延長によって補った。

官庁といわず、企業体といわず、学校といわず、病院といわず、およそありとあらゆる人間の働いている場所で、この運動期間中の操業時間の延長はもにすごいものであった。ぶっつづけ十二時間操業や勤務などはごくごく普通の方で、夜十時になっても十一時になっても、オフィスや工場の窓にはまだ明々と燈が輝いていた。朝五時のメインストリートには、すでに出勤者の群があふれ、幹線の交通機関は徹夜

で運転をつづけていた。

勤務時間を延長して働くことが、光栄であり、誇りであって、夕方の五時や六時に家へ帰るなどという肩身のせまい思いをする弱虫は見当らなくなってしまった。私の知っているある労働者は、自分のやりはじめた技術改良に夢中になって、毎朝二時に起きて、自分の職場へかけつけた。

北京中が下から盛り上がった「働け」「働け」の熱気にうかされて、無我夢中になって働いた時期であった。業種を問わず、地位を問わず、この時期ほどあらゆる部門の従業員の作業意欲の高揚した時期を、それ以前においても、それ以後においても、私は見たことがなかった。

私たちの新工場の建設の仕事も同様で、五八年の秋から五九年の秋までちょうど一年間、私は、朝は五時に起きて建設現場へ行き、仕事が終って家へ帰ってくるのは、だいたい夜の十時過ぎであった。これは、何も私一人のことではなくて、私たちの工場のほとんど全部の従業員がそうであり、全北京の事業体のほとんど全部の従業員がそうであった。

産業部門の躍進にならって、商業部門や服務業の従業員たちも、この運動の前線に参加した。バスや電車の車掌は、子連れの乗客からは子供をうばい取るようにして抱いて乗り抱いて降り、乗客に車中で白湯（さゆ）をサービスし、乗客のたいくつしのぎに、にぎやかに漫才を語って聞かせた。商店の売り子たちは、商品を荷車につんで店を出て胡同に入り、胡同から胡同へと呼び声高く行商をしてあるいた。北京中の人びとが、一番親切になった時期であった。

超音波ブーム

全国的に、土法製鉄のブームが、一時、嵐のように暴れまわったのと同様に、このとき、北京の事業体には超音波ブームなるものがおこり、これがあらゆる職場を席巻した。

突然に、ほんとに突然に、この思いもつかない着想が職場に持ちこまれて、あっという間もなく全市中に猛烈なブームを引きおこしたのであるから、この発想の根源は、案外北京市のトップクラスのスタッフか、あるいはまた、中央の工業関係のヘッドスタッフあたりかもしれない。そうでもなければ、この超音波ブームのあまりにも速すぎる伝播速度は理解することができない。

あるいは、その提案者のほんとの意向は、「産業界で、一部、超音波の利用を考えてみたら、大躍進のためになるところがあるかもしれない」という程度のものであったかもしれない。しかし、基層単位の職場では、それが「超音波は、産業のあらゆる分野にとって非常に強力な増産促進デイバイスである。これを応用すれば、自分たちが今直面して解決に苦しんでいる大躍進上の問題点は、立ちどころに解決することができる」と理解されたのであった。そこで、われもわれもと超音波の応用がはじまった。

機械工場では、旋盤で切削中の丸棒や、砂型に鋳込み中の熔銑（ようせん）に、超音波をかけた。病院では、内科や外科の病人に超音波をかけ、食堂やホテルでは、皿洗いや消毒にはもちろんのこと、卵焼きにまでこれを応用した。製紙工場も、染色工場も、化学工場も、とにかく、ありとあらゆる産業部門が、なんとかかんとか超音波の応用箇所を見つけ出して無理矢理にこれを応用し、その効果をまた大々的に発表した。

こうなると、問題になるのは、超音波の発生源である。一週間や二週間の間に、全北京中に行きわたるほどの量が作り出せるはずはなかった。すると、また、どこからともなく噂のように伝わってきて、あっという間に北京中にひろまったのが、簡易超音波発生機であった。それは、ちょうどSLや汽船の汽笛のように、圧縮空気や高圧蒸気のメインパイプから枝管を必要な箇所まで伸ばしてきて、その先端に「超音波発生専用」と称する笛をくっつける方法であった。「これなら、わけはない。俺のところだって十や十五はすぐできるよ」とばかり、超音波を使いたいと思う事業体は、みんなこれにとびついて作りはじめた。

試験してみると、この小さな、小さな笛は、枝管のコックを開いて空気を通すと、ピーピーと可愛らしい音を立てて鳴り出した。このピーピーは、どう聞いてみても、せいぜい三千サイクルか四千サイクルくらいの音で、耳にはっきり聴えるのであるから完全な可聴周波音で、そのほかには超音波などとい

うものは一向に出てはいないらしかった。ところが、使う方では、そんなことにはおかまいなく、これだこれだとばかり、あらゆる事業体でみんな、このピーピー、ピーピーをやりはじめた。そして、また、その効果が素晴らしいものだと、具体的な数字を挙げて、つぎからつぎへと発表された。

私も、引っ張り出されて、多くの、このピーピーの試験操業に立ち会った。彼らの発表数字をそのまま鵜呑みにすると、全然超音波の出ていない笛が非常に大きな超音波効果を挙げている場合もあり、また、詳細に計算してみると、せいぜい三ワット程度の出力の超音波が、なんと一キロワット以上の仕事をしており、完全にエネルギーの法則など糞くらえという場合もあった。

この超音波応用も、結局のところはインチキであった。そのインチキであるゆえんは、けっして超音波そのものが工業生産に効果がない、というわけではなくて、この運動中に応用した超音波源は、超音波の出ていない超音波源であったり、または、小さな小さな超音波源に、その何百倍もの仕事をさせようとしたところにあった。超音波の応用試験のときに出てきたその効果は、超音波試験にたずさわった労働者が、その効果を信じ切っていて、「もしこの試験にいい結果が出なければ、それは、自分自身の操業方法に欠陥のあるためであろう」と思いこんで、操作に極度の注意力を集中した結果によるものが多かったわけであった。

こうして、下から盛り上がって前代未聞の熱意と生産意欲とをもって展開された大躍進運動は、各層指導者の計画性、技術指導力などの不足のために伸び悩みとなり、「多・快」の目標は、ある程度実現したが、「好・省」は、全く逆の結果を生むところが多く、低迷をつづけているうちに、一九五九年からはじまった全国的な食糧不足の大浪をまっこうからかぶって立ち消えになってしまった。

私は、この運動は非常によい運動であり、これが尻切れトンボに終ったのは、中国産業の発展のために、たいへん惜しいことであったと思っている。後に六六年からはじまった文化革命運動などという、騒ぎばかり大きくて実質的には何の具体的な効果もたらさなかった運動とはちがって、もし適当な指導力をもって、この大躍進運動を指導し発展させていたならば、今の中国産業は、おそらく非常な発展をしていたにちがいない。

この運動のもう一つの特徴は、この運動中に、非常に多種類の分野にわたって、小さくはあるが、内容の優秀な工場が、大衆の創意と熱意で発足し、操業を開始したことであった。

街のラッパ工場

この運動の少し下り目になったある日、小さな、ラジオのラッパを作っている町工場の職工だという街の小母さんが二人、突然、私をたずねてきた。「うちで作っているラッパを鑑定して、改良意見を出してもらいたい」という。

つぎの日、私はジープをとばして、東四（トンスー）の北の小さな胡同の奥にある、その教えられた地点まで行ってみた。ところが、彼女たちの残していった番地の家は、間口三間ほどの南京袋の再生工場で、路地いっぱいに埃を立てて二、三人の女工が古南京袋をったいていたが、ラッパ工場らしいものはどこにも見当らなかった。表で南京袋をたたいている小母さんに聞くと、「ああ、そのラッパ工場なら、うちの裏の倉庫の中だよ」と言う。

「入り口はどこにあるの。どこから入っていくの」

「うちの店の中を通っていくんですよ」

なるほど、その店の裏に、かなり広い空地があり、一隅に錆びたトタン葺きの六十平方メートルくらいのボロ倉庫が建っていて、その中で二十人ほどの街の小母さんが、四インチと六インチのラジオ用のラッパを作っていた。

私は、ひととおり、その全く手工業的な製造工程と、全部自家製の設備と工具を見てまわった後で、しみじみと製品を手に取って眺め、その音を聞いてみて、ほんとうにびっくりした。その小母さんたちの作ったラッパの方が、作りといい、当時、上海や北京の専門工場で作っていたラッパよりはるかによかったのである。「こいつは、たいへんな掘り出し物の工場にぶつかった」と思って、私は、じっくりと工場の土間に坐りこんで、彼女たちの苦心談を聞

くことにした。

その工場の責任者は、朝鮮戦争で負傷して帰休した傷痍軍人で、この工場の中のたった一人の男性であった。その人が、私に詳しく工場の歴史と現況を話してくれた。

生産関係部門の飛躍的増産運動の浪が高潮してくると、この附近の胡同に住む小母さんたちも、「私たちだって何かやらなきゃ」という気運が高まって、寄り寄り相談をはじめたがなかなかうまい案が見つからなかった。そこへちょうど彼が傷痍軍人として帰休し、この胡同に住みついたので、それっとばかり小母さんたちは彼を取り巻いた。

彼も、工業関係には全くの素人で、いくら相談を受けても、どうしていいか分からなかった。そこで、自分の軍隊時代の友人で、いま北京の北の郊外にある無線電信機材の製作工場に勤めている男に、この話を持ちこんで相談した。すると、その男は、「それは、ちょうどいいや。いま俺のところの工場でラジオ用のラッパのフレームのプレス成型が間に合わなくて大弱りなんだ。請け負いで外注に出そうという話がいま会議でまとまったばかりのところだ。それをやってくれないかな。なに素人にだってできるサ。うちの工場から、ダルマプレス二台とモーター、それに抜き型、上下の整形型は貸してやるから、君の方では、それを据えつけて、動力源の引き込み配線だけしてくれれば、それでいい。材料の鉄板はもちろん、うちの工場から供給する。塗装用の小道具やなんかは、まあ、君の方で、そこらのペンキ屋の親父かなんか探し出して適当にやってくれよ」と耳よりの話を聞かせてくれた。

彼の報告をきいて、小母さんたちはもちろん大喜び。フレームとか、ダルマプレスとか、むずかしいことはわからないが、とにかく道具一切と材料は向う持ちで、仕事は自分たちでも割り合いに簡単にできる仕事だというので、「こんなよい条件の仕事はない。それに決めた」と相談は一決した。

そして、その小母さんたちの中で割り合いに年の若い人四人を選抜して親工場へ製造工程の見習いに派遣する一方、すぐ借り入れた工作母機の運搬に取りかかった。もちろん建設資金などは、どこからも補助してくれるところはなく、完全な「自力更生」で、小母さんたちのポケットマネーの集積であった。

工作機械の運搬も、一銭でも倹約しろとばかり、自分たちで大八車を借りてきてそれを曳いて取りにいった。親工場までは、往復三十キロ以上の道のりである。生れてはじめての重量物運搬で、積み荷のバランスが悪く、途中で重心が後へ移動して、前の曳き手が宙にはね上げられたり、大八車を道路の変なところに止めてひと休みして、交通巡査やトラックの運転手に怒鳴られたりしながら曳いてきたので、途中で夜になった。夜曳きは止めて、二人が大八車の傍で不寝番につき、その他の人びとは家へ帰って寝て、次の日またつづけて曳きにいった。

工作機械とモーターの基礎打ちは、小母さんの中の一人の親戚に停年退職した機械工がいたので、その人を引っぱり出してきて指導してもらい、土建会社の倉庫のこぼれセメントをもらってきて、みんなでコンクリートねりをして築き上げた。動力線の室内配置は、これも、ある小母さんの息子の電気工に退勤後の時間を利用してやってもらった。

そして、この工場は動き出した。「みんな素人なのだから、教えられたとおりに真面目にやらなければならない」という、その真剣さが結集して、製品の品質は上々であった。

二十人ほどの小母さん労働者の勤務時間はたいへんに弾力性のあるもので、子供や孫を小学校へ毎朝送っていかなければならない人は、まずさきに送っていって、それから出勤した。お昼に、主人や息子たちが、昼食に帰ってくる家の小母さんたちは、その時間に間に合うように自宅へ帰り、後かたづけが済んでからまた、出勤して仕事をした。孫の守りをしなければならない小母さんたちは、孫をつれて出勤して、仕事中は、手の空いている人が交替でその孫たちの面倒をみてやった。

工場の営業成績はたいへん良好で、四か月の操業期間中に、各人にそれぞれ相応の給料を支払ったほかに、相当の余裕ができて、小母さんたちのポケットマネーの資本金は全部返済して、その上、連れて

きた幼児のために遊び場も作ってやった。

「さあ、これからが本格的の大躍進だ。今にこの工場の製品高を何十倍にも増産してやるから」と、小母さんたちが張り切ったとたんに、一大問題がおこった。それは、突然に、親会社が、「自分たちの増産体制ができ上がったので、これからは、もう請け負いの外注は取り止めて、自家工場でラッパの一貫製造をする。あんた方は別に何かほかの製品を探してくれ。ただし、いま使っている工作機械や工具一切はあんな方に贈与するから、返却するには及ばない」と通告してきた。

そこでまた、転業に関する小母さんたちの会議が何日もつづいた。工場を止めようという人は一人もいなかった。何を作ることにしたら一番いいかという会議であった。

これを作ったらいいだろうという案が出されると、小母さんたちは、みんなそろって、その製品を作っている工場へ見学に行った。しかし、どの案もあまり思わしくはなくて、どこかに引っかかる難点があった。

とうとう最後に、「今までラッパのフレームを作っていたんだから、ラッパには多少の縁とつながりがあるわけだ。いっそのことラッパを作ったらどうだろう。そうすれば、少くともフレーム作りの部分だけは今までの工作機械と自分たちの経験がそのまま使えるし、それに、今の様子ならばラッパの販路には問題がないから」という意見が出て、みんなその意見に賛成し、とたんにラッパの一貫製作工場が発足した。

「可動線輪」のボビンや捲き線やダンパーは、見よう見真似でなんとかかんとか作り上げたが、コーン紙にいたってはたと難関にぶつかった。

はじめは、なんだこんなものと思って、画用紙を買ってきて三角形に切り抜き、合わせ目を糊ではりつけた。ラジオ屋に見せると、「こんなコーンの作り方では音が悪くて駄目だ」と、コーンの製作のむずかしさを、さんざん説明された。なるほど専門工場で作ったラッパをしみじみ眺めてみると、継ぎ目のあるコーンなどというものは一つもなかった。「どうして作るんだ」ときくと、「バルブを型に流しこんで鋳込むのだ。自然乾燥させて成型するのが最新式の製法で、圧力を加えて無理に成型すると音が悪い」と教えられた。

この小母さんたちのよさは、先輩に教えられたことは、必ずそのとおりに実行して、もしその途中で具合の悪いところが発見されれば、そのときは、またそこでみんなで相談して方法を考えてゆくというところであった。「それでは、まず、そのバルブというものを作ろう」ということになって、例によって、三人の人が北京の東郊の製紙工場へ見学に行った。

ところが、このバルブなるものは、そう簡単にできそうもない代物であった。そこで、おそるおそる工場の責任者に、ビーターにかけ終って製紙網かブランケットにかける前のバルブを、自分たちが取りにくるから、毎日二、三キロほど分けてもらえないだろうかと頼みこんでみた。「いま大増産で、うちの工場自身がバルブが足りないんだよ。それに、毎日二、三キロずつなんて、そんな面倒くさいことができるもんか。バルブが欲しいんなら、工場の庭の隅にバルブ原料の屑がいくらでもころがってるから、それを掃き集めて持って帰って、自分たちで何とか工夫しなよ。ただでやるから」と、ぽんとはねられた。

「よし、それなら、バルブ原料の屑をもらってきて、自分たちでビーターを作って、コーンのバルブを自製しよう」

小母さんたちは決心して、すぐ、ビーターの製作にとりかかった。とはいってみても、図面が書けるわけもなし、また図面が読めるわけでもなかった。それに製紙工場で使っているような大きなビーターなど作れば、この倉庫工場には据えつける場所もなかったので、適当に縮小しなければならなかった。

小母さんたちは、この困難にも負けなかった。彼女たちは、すぐ製造班と見学班の二組に分かれた。製造班は、木の板きれを集めてきて、それをひき鋸でけずった。失敗すれば、何度でも得心のいくものができ上がるまで飽きずに作り換えるのであった。

見学班は、一日中、製紙工場のビーターのまわりをまわり歩いて、帰ってきては、あそこはこう、ここはこうと製作班に、その構造を口で説明した。寸

法を指示するときは、現品のその部分にひもをあてて、その寸法に切断したひもをもって帰ってきた。どうしても構造をはっきり説明することのできない場合には、製作班の人びとを一緒に製紙工場までひっぱっていって現品を目の前において説明した。操業中は見ることのできない、ビーターの内部構造は、製紙工場のビーター大修理の日に、修理を手伝いながら見学して内部構造を確かめた。

鉄製部品や切削を必要とする部品は、廃品商から買ってきたものか、附近の町工場の知り合いに無理矢理に頼んで作ったものばかりであった。私が行ったときには、楕円形の長辺が一メートル半にも満たない、この小さなビーターは、立派にでき上がって操業しており、さかんにバルブをすり砕いていた。このバルブをコーン型に流しこんで、どうやらノンプレスコーンの問題は目鼻がついた。

つぎにおこったのは、マグネットの問題であったが、これも、コーン紙を作ったときと同じ努力をして、錆びた鉄片を薬研(やげん)で砕き、篩(ふるい)でふるって、バインダーをまぜてから、庭の自分たちで作った炉に入れて焼結成型した。そのあとの磁化には、トラックの古バッテリーを利用して着磁し、磁石として使用した。

この小母さんたちは、これらの全工程を二か月半で完成した。はじめての試作品のラッパが五つでき上がったときは、小母さんたちはみんな涙を流しながら、工場のボロラジオにかわるがわるそれらを繋ぎかえて、夜半まで聞き入った。良心的な製品であったし、製品ははじめからたいへんよく売れた。

この話を聞いてから、私は、彼女たちの製造工程をもう一度、ひとつひとつ丁寧に見てまわった。いたるところに、彼女たちの素朴な創意が光っていた。

コーン紙のでき上がりを最後に検査する五十がらみの小母さんは、十五ワットの裸電球をつけたスタンドを白木の机の上に置いて、その前にデンとかまえ、でき上がったコーン紙をひとつひとつ丁寧にその電燈にかざして、通過する光の濃淡でその厚さの平均度と中に混じった不純物の検査をした。少しでもむらのあるものや、少しでも中に粒々(つぶつぶ)のあるものがあると、この小母さんは、何の遠慮もなくどんどん廃品箱へ抛りこんだ。

「このラッパは三円五十銭で売るのです。こんなむらのあるのは音が悪いんです。自分の靴を買いにいって選ぶことを考えてみなさい。恥かしくてお客さんに売れますか」

検査工の小母さんは、昂然として私に言った。そして、この小母さんは、ほかに少しの欠点がなくても、コーンの発声部分と周辺のエッジの部分が同じ厚さのものは、どんどん廃品箱へ投げこんだ。「どうしてだ」と私が聞くと、彼女は、エッジの部分を指さして、「ここんとこ、薄ければ薄いほどいい音がするんです。真ん中と同じ厚さのは、長くきいていると頭が痛くなるような気がして駄目です」と答えた。彼女は、このときもうすでに、エッジから出る音の干渉によるひずみを経験によって察知していたのであった。

最後に、この工場の責任者はいった。「こんな小さな工場は、市でも区でもかまってはくれません。自分の力だけでやるより仕方がありません。いま一番欲しいのは、ラッパの性能試験や磁石の磁力や耐久力を試験するための試験機器です。だれも買ってくれなければ、自分たちが儲けたお金をためて買います」。

私は、帰ってから、手許にあった日本のラジオ雑誌を四、五冊、彼女たちの工場へ寄贈した。そして、それと同時に、当時、全北京市の機械と電機部門を管理していた機・電工業管理局の局長に宛てて、詳細にこのラッパ工場の実状報告を書き、最後に、「小さくても、このラッパ工場のように熱意と創意に満ちた工場は、このほかにもまだ北京にたくさんあるはずだから、それらの工場の発見と育成に力を入れてもらいたい。工場のよしあしを、ただその工場の図体の大きさや従業員の人数の多い少ないできめて、大きい工場だけ面倒をみたがる悪いくせは止めてほしい。まず、このラッパ工場に三、四万円の補助金を出して、試験機器類をひと通り揃えてやってくれ」という意見を書いて送ってやった。

ところが、彼からは、「あなたの報告書は、たいへん生き生きとその工場の実情を描写してあって面

白く読んだ。しかし、いくらその工場に試験機器を買ってやってみても、技術員一人いないそんな工場が、これ以上発展できるはずはない。それよりも、北京市には、ラッパを作っている割り合いに大きい工場があるから、この工場はその方に合併することを考えている。そうすれば、技術員の問題も試験機器の問題も、一挙に解決することができるから」と、彼の知能レベルで考えた、そして私が一番恐れていた返事をしてきた。

このような、小さな、非常に特徴のある工場を、大きいだけで、平凡な何の特徴もない工場に合併すると、その小さな工場の特徴が大きな工場の平凡さの中に吸収されてなくなってしまう。そして、全体的には平凡な工場になってしまう。小さな、そして特徴のある工場は、その特徴をさらに育成して発展させ、こんどは逆に、その発展した特徴で、大きな、平凡な工場をリードしていくのがいい方法だと私は思っている。しかし、この局長は、ラジオのラッパが重工業機械ではないという理由と、工場があまりに小さくて、」おまけに素人の小母さんばかりだという理由のために、その熱意と創意を、大躍進の中に生かして、これを独自に育成し発展させようとはしなかった。そして、彼女たちを平凡な大工場の中へ吸収合併して、その熱意と創意を、時代的平均的な平凡でおしつぶしてしまったのであった。

下から盛り上がってきた、あの大躍進の熾烈な熱意を指導することもできず、育成することもできず、どれもこれもみんな中途半端に終らせてしまった原因の一つは、このような各層指導者の無定見であった。

〔『北京三十五年　中国革命の中の日本人技師下』岩波新書、1980年、pp.50-69〕

魯迅邦訳の比較をとおして、自省（反省＝闘争）の力を考える

前田年昭

一

60年代末に澎湃として日本や世界でわき起こったベトナム反戦運動の背景には自らの生活と存在が侵略者アメリカに加担してはいないかどうかという自省があった。自分自身を一方的に被害者とするだけにとどまらず、自らの内に入り込んだ加害者＝侵略者のありようを直視し、変革しようという志向があったのだ。

「大東亜戦争」における侵略者日本の思想を洗い流すことなしには、抵抗者アジアの力は視えなかったという反省が、戦後日本社会の良心を形づくっていた。軍国主義に「だまされた」とする被害者意識にとどまることなく、そこからさらに、なぜ軍国主義に染まってしまったかという反省＝闘争が始まろうとしていた。人びとはアメリカのベトナムへの侵略前線基地としての日本という存在を直視し、反省＝闘争へ立ち上がっていったのである。

二

魯迅に「一件小事（小さな事件）」という掌編がある。1920年7月に書かれ、『吶喊』（1923年）に収められた。初出は1919年12月1日北京『晨报・周年纪念增刊』である。『晨报』は1916年に李大釗が創刊、自ら編集長に就いた新聞だ。同紙は、魯迅も『阿Q正伝』や『故郷』を発表し、現代中国文学で大きな役割を果たした。

「一件小事（小さな事件）」は、回想である。私は人力車を雇う。前を横切ろうとした老女の着物が人力車の梶棒に引っかかり、彼女は地面に倒れてしまう。私は車夫に「何でもない、行け」と言うが、車夫は彼女を助け起こし、具合を訊ねる。彼女は「ころんで怪我をした」と答え、車夫は彼女を支えて派出所に向かう。私は突然、車夫が大きく見え、自身の「卑小さ」に気づかされる。派出所から来た巡査に私は、車夫に渡して欲しいとお金を渡す一方でお金の意味を自問自答するが答えられない。この出来

事をしばしば思い起こして、私は自分自身を見つめ直す。――そういうあらすじである。

その結びの一文が「独有这一件小事，却总是浮在我眼前，有时反更分明，教我惭愧，催我自新，并且增长我的勇气和希望。」である。ここで比較検討する五つの邦訳は次のとおり。

①たった一つこの小さな事件だけは、いつもいつも私の眼の前に浮んで、時に依るとかえっていっそう明かになり、わたしをして慚愧せしめ、わたしをして日々に新たならしめ、同時にまたわたしの勇気と希望を増進する。
――井上紅梅訳「些細な事件」、『魯迅全集』改造社、1932

②ただこの小さな出来事だけが、いつも私の眼底を去りやらず、時には前にもまして鮮明にあらわれ、私を恥じさせ、私を奮い立たせ、さらにまた、私の勇気と希望を増してくれるのである。
――竹内好訳「小さな出来事」、『魯迅選集　第1巻』岩波書店、1956

③しかし、この小さい事件だけはいつも私の目の前から消えることがない。いや、時には、更に一層、鮮明な記憶となって私を恥じいらせ、私の更新をうながし、同時に、私の勇気と希望とに、更に力を与えてくれるのである。
――田中清一郎訳「一件小事」、『魯迅選集第1巻　阿Q正伝・狂人日記・他』(青木文庫) 青木書店、1963

④ただこの小さな事件だけが、どうしても私の眼前に浮び、時には以前にもまして鮮明になり、私を恥じ入らせ、自己変革をうながし、且つ私の勇気と希望とを増してくれるのである。
――高橋和巳訳「小さな事件」、『吶喊』(中公文庫) 中央公論社、1973

⑤ただ、この小さな事件だけが、どうしてもわたしの眼前に浮び、時には以前よりも鮮明になり、わたしを恥じ入らせ、わたしに自ら革新することを促し、そしてまたわたしの勇気と希望とを増大してくれるのである。
駒田信二訳「小さな事件」
『阿Q正伝・藤野先生』(講談社文芸文庫) 講談社、1998

中国語は辞書がようやく引ける程度、初学者とさえいえぬレベルの私には、邦訳の比較検討など本来出来ない。しかし、無為より無謀、ここでは邦訳の日本語としての検討という「無謀」をお許し願う。また、より重要なことであるが、魯迅邦訳史の研究という立場からすれば歴史性の検討が前提的になされるべきで、時系列を捨象しての比較検討はいささか乱暴で酷であることもまたお許し願う。

私は「催我自新」の翻訳の違いに注目した。直前は「私を恥じ入らせ」、結びは「同時に私の勇気と希望とを増してくれる」と、どの訳もあまり変わらない。なのにここはかなり違う。

わたしをして日々に新たならしめ（井上紅梅訳）
私を奮い立たせ（竹内好訳）
私の更新をうながし（田中清一郎訳）
自己変革をうながし（高橋和巳訳）
わたしに自ら革新することを促し（駒田信二訳）

①③では「私」は受け身であり、いかにもな直訳であろう。④⑤では「私」は変革や革新の主体であり、能動性が明確で①③と対照的である。②（竹内訳）はどうであろうか。結論から言えば、②はとくに、前の「私を恥じ入らせ」と切断されてしまっている。「恥じ入らせ」た過去を繰り返し思い起こすのはなぜ、何のためか。それは、他の訳が共通して浮かび上がらせているとおり、自らを振り返って反省の糧とするためではないのか。しかも「私を奮い立たせ」では、後の「私の勇気と希望を増してくれる」とほとんど同義となり、「さらにまた」（他の訳では、「そしてまた」「同時に」）と繋ぐ意味が弱くなってしまうではないか。

明快な高橋和巳訳と対照すると分かりやすい。「私を恥じ入らせ、〔ここに他の訳と違って「私」を繰り返していないことも明快〕自己変革をうながし、且つ私の勇気と希望とを増してくれるのである。」

――恥ずかしい思いをした出来事を反省の契機とすることによって前へ進む意欲がわいてくるというのだ。これを図解すると次のようになる。

《「私を恥じ入らせ」＋「自己変革をうながし」》
且つ（同時に／そしてまた）
《私の勇気と希望とを増してくれるのである。》

魯迅の原作が含意する反省の契機を欠落させた竹内好訳は日本語として適切ではない。中国や魯迅の研究においても日中関係史においても大きな仕事をした竹内好の評価を――翻訳のこの部分のみを取りあげて――云々するつもりはない。だが、明らかに竹内訳のこの部分は、反省＝闘争という契機を欠いており、それゆえ原作を伝え得ていない。

事あるごとに李長之を援用する竹内好は、魯迅作品について「農村ものにくらべると、彼の都会ものは、数も少なく、すべて成功していない。小市民の、殻のなかでの不平や自己満足の生活を、風刺的に、あるいは曝露的に、描こうと意図したらしいが、それが作品的に再現されずに、半透明な虚像になって、現実味を帯びてこない。その原因は、李長之によれば、彼の環境憎悪が激しいからだという。そうかもしれない。現実に密着しすぎて、ながめる目の余裕がないせいだろう。」（『魯迅入門』講談社文芸文庫、1996年）と断じるが、果たして「すべて成功していない」のか。

高橋和巳は「自立の精神　竹内好における魯迅精神」を書いて、竹内への強い敬愛を前提に「竹内好の魯迅研究はさまざまの問題性をはらんでおり」として再検討している。その血の出るような文を、モンテスキュー『法の精神』序文を引きつつ次のように結んでいる。

> 『日本プロレタリア文学全集』の編集にも参加している竹内好が、戦後もなお魯迅のこの領域〔引用者註――『中国小説史略』を中心とする魯迅の考証学的作業〕にふれないのは何故であろうか。しかし、こうした部分的疑義は、どうしても揚足とりになりがちであるし、発憤してなされた著述に対して、部分的批判は所詮無意味である。いずれ、それら、私の内部にある魯迅像は、自己の未来への責任においてみずから構築し、そしてそれを竹内好の魯迅と対峙させればよいのであり、そしておそらくは、それが最高の批判形態でもあるだろう。

魯迅の日本における受容の多くは（李長之を援用する）竹内好に負ってきた。しかし、瞿秋白に導かれて魯迅を読んできた私はかねてからざらざらとした違和感を竹内訳に感じ続けてきた。なぜか。理由は引き続き考えていきたいが、今回の一文はその第一歩である。過程で再読した高橋和巳は私の背骨を伸ばさせてくれる。私は確かな魯迅精神を高橋和巳のなかに見いだすとともに、私自身の「揚足」の小ささを見つめずにはおれない。

三

魯迅作品の基底に貫かれる自省は、現状に不満を抱き変革をめざす立場からは希望の糧となる。魯迅を暗いと感じる感性の大半は、事実を直視する苦痛を避け、現状維持の立場から来るものである。

1949年の中国革命と新中国建国は、呻吟していた下層民衆に息できる生活をもたらした。しかし早くも60年代前半には、革命の初心が忘れられ、党組織が腐臭を放ち始めていた。親の出身階級にもとづく差別は社会を閉塞させ、民衆の怨嗟は高まっていた。唯物論は簒奪され、現状変革ではなく現状維持の手段に転じた。胡傑『星火』が伝えるように抵抗は「右派」とレッテルを貼られ、反右派とは権力による抑圧に他ならない。かつての弱者は特権階級に成り上がり、現状変革のエネルギーを封じたのだ。機械的唯物論は人びとを醜悪にし、政治を腐敗させる。

強い危機感を抱いた毛沢東は「人間の正しい思想はどこからくるのか」という短い哲学論文を書き、人間の主観的能動性の役割と力を位置づけた。文革発動2年前の1964年5月だった。毛沢東は、自然と社会と自己の変革を三大実践として強調した。北京・外文出版社による「人間の正しい思想はどこからくるのか？」日本語版は三大実践を生産闘争、階級闘争、科学実験と訳した（私の理解では、自然の

変革、社会の変革、自己の変革と訳したほうが適切だと思う)。

近年の日本の「反原発」運動の一部に見られる傾向には、「反原発」を錦の御旗として絶対化し、「全国民的運動」(レーニン)の誤りに陥ってしまっていないだろうか。たとえば、吉本隆明や大西巨人とは私はかなり立場も考えも違うが、彼らの原発容認と取れる発言を「老醜」と切って捨てるのはとてもよくないことだと思う。異論反論があれば、公開して、論じ合えばいいではないか。そんなに「反原発」が絶対正義というなら、それがなぜ実現できないのか、自らの反原発運動のあり方を振り返ってみる必要があるのではないか。社会運動がただ運動することのみを自己目的化するなら、そして、異論を「非国民」と排除し、小馬鹿にするなら、そのような反省の契機を欠いた社会運動は人びとの心に触れ得ず、それゆえに、変革の世論を作り出すことはできないだろう。

政治なき文学は閉じた自慰でしかなく、文学なき政治は硬直、腐敗する。

(まえだ・としあき、本誌編集)

高橋和巳訳「小さな事件」(魯迅「一件小事」)

私が田舎から北京へのがれ出てから、またたくまにもう六年になる。その間見聞きしたいわゆる国家の大事は、数えあげれば少なくない。だが私の心には、すべて何の痕跡も残していない。もしそれらの事件の影響を穿鑿(せんさく)して言うなら、ただ私の癇癖(かんぺき)をつのらせただけ——実際のところ、日ましに人を見さげるようになっただけだった。

ただ一つの事件だけが、私にとって有意義であり、私を癇癖からひきはなしてくれる。今にいたるも私には忘れられない。

それは民国六年の冬、北風が吹きあれていたが、私は生計上のことから、朝早くから路上を歩かねばならなかった。街路にはほとんど人影はなく、やっと一台の人力車をひろい、S門まで行かせた。しばらくして、北風はややおさまり、路上の塵はとっくに吹き清められて、清潔な大道路が残り、車夫の足もより軽くなった。S門に近づいてたとき、突然車の梶棒に一人の人がひっかかって、ゆっくりと倒れた。

転倒したのは一人の女だった。白髪まじりの髪、衣服はぼろぼろだった。彼女は大道路のわきから突然車の前を横ぎろうとした。そのまえに車夫は道をよけていたのだが、彼女の破けた綿入の袖無しにはボタンがなく、微風にああおられて拡がり、それで車の梶棒にかぶさってしまったのだ。幸いに車夫はとっくに歩みをゆるめていた。でなければ彼女はきっとひっくりかえり、頭を割って血を流していただろう。

彼女は地面に伏せ、車夫はすぐさま脚をとめた。私はその老女は怪我をしてはいないと判断した。それに誰も見ていない。車夫が余計なことをして、自分からいざこざをひき起して、手間どってはと思った。

それで私は車夫に言った。「何でもありゃせん。行け！」

車夫は全くかまわず——あるいは聞えなかったのか——梶棒をおろして、その老女をゆっくりと扶(たす)けおこし、腕を支えて立たせ、彼女に尋ねた。

「どうだね？」

「ころんで怪我をしたよ」

私は思った。私はこの眼でおまえがゆっくりと倒れるのを見た。ころんで怪我などするものか。大げさに振舞ってるだけだ。憎々しいやつめ。車夫は余計なことをし、自分から難儀を背負いこんだのだから、いまはおまえ自身で処理すればよい。

車夫はこの老女の言葉をきくと、少しも躊躇(ためら)わず、元通り彼女の腕を支えて、一歩一歩歩いていった。私はいささかけげんに思い、あわてて前を見た。そこは警察の派出所だった。大風のあとのこととて、表には巡査はいなかった。車夫はその老女を扶けつつ、その正面に向って歩いてゆくところだった。

私はこの時突然、一種異様な感覚を味わった。彼の埃まみれの体の後影が、たちまち偉大になった。歩くにつれてますます偉大になり、仰ぎ見なければ見えないほどになった。しかも彼は私にとって次第に威圧めいたものに変り、毛皮の着物の下にかくされた私の「卑小さ」をしぼり出さんばかりになった。

私の生命力はその時渋滞したようだった。坐ったまま動きもせず、考えもしなかった。そのまま派出所から一人の巡査が出てくるのを見て、やっと車をおりた。

巡査は私のほうに近寄って言った。「御自分で車をひろって下さい。彼は車をひけなくなりましたから」

私は無意識的に外套のポケットから銅貨をつまみ出し、巡査に渡して言った。「彼にわたして下さいませんか……」

風はまったくやんだ。路上はごく静かなままだった。

〔17ページにつづく〕